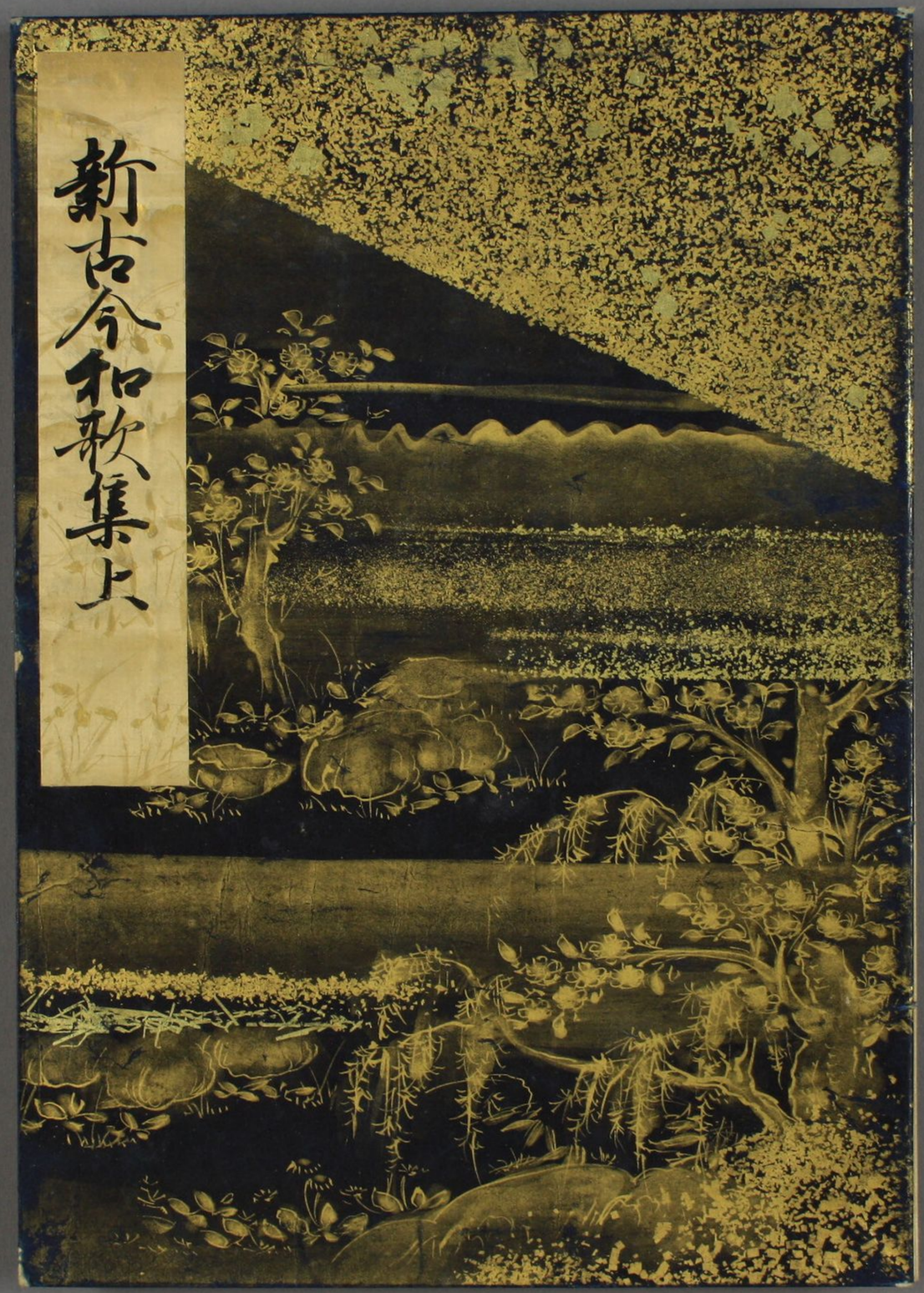
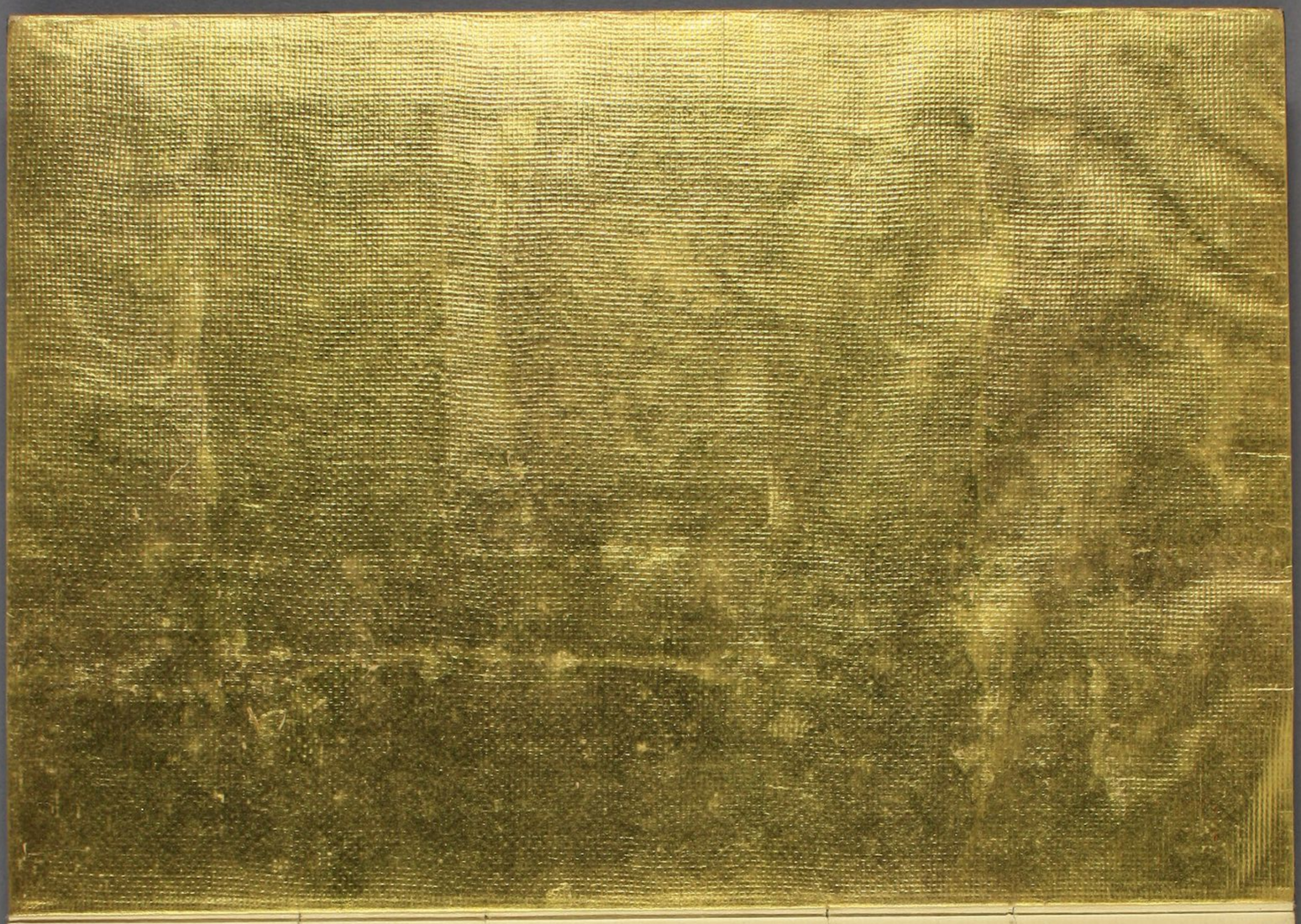

新古今和歌集上



新古今和歌集序

史和歌者群德之祖百福之宗也玄象天成五際六情之義未著素鶩地三十一字之詠甫興尒來源流寔繁長短雖異或舒下情而達閔或宣上德而致化或属遊宴而書懷或採艷色而寄言誠是理世抵民之鳴徽賞心樂芟之龜鑑者也是以　聖代明時集而録之各窮精徽何以漏脱然猶嵩嶺之玉採之有余鄧林之找伐之無尽物既如此歌亦宜然仍詔參議右清門書源朝臣通具大藏卿藤原朝臣有家左近清權中將藤原朝臣定家前上総介藤原朝臣家隆左近清權少將藤原雅經等不択貴賤高下令擁錦句玉章神明之詞佛陀之作為表花歳雜而同緑始於曩昔逮于當時彼此総編各俾呈進毎至玄圃花芳之朝瑣砌風涼之夕斟難波津之遺流尋浅香山之芳躅或吟或詠拔犀象之牙角無黨無偏採翡翠之羽毛裁成而得

二千首類聚而為二十巻名曰新古今和
歌集矣時令節物之篇属之序而星羅
衆作雜詠之什並群品而雲布綜之得
致蓋云備矣伏惟来自代邸而踐天子之
位謝於漢宮而追汾陽之蹤今上陛下
之厳親也雖云深帝道沿諭日域朝廷本
主也争不賞我國之習俗方今荃宰合
體花夷詠仁風化之楽万春春日野之
草悉靡月宴之契千秋秋津洲之塵
惟靜謐靡月云為有截之時可嘱染毫
採綴之志故撰斯一集永欲傳百王撫
上古之万葉集者蓋是和歌之源也編
次之起因准之儀星序惟邈烟轉難
救延喜有古今集四人含綸命而成之
天暦有後撰集五人奉綸言而成之其
後有拾遺後拾遺金葉詞花千載等
集雖出於聖王數代之勅殊恨為撰
者一身之前周茲新延喜天暦二朝之
遺美定法河歩虚五輩之英豪排神
仙之居展刊修之席而已斯集為躰

也先抽万葉集〻中更拾七代〻集外
深索而微長無遺廣求而斥善必舉
但雖張細於山野微禽自逃雖連筌於
江湖小鮮偷漏誠當視聽〻不達定有篇
章〻猶遺今只隨採得且所勒終也抑
於古今集者不哉當代〻御製自後撰
而初加其時〻天章各考一部不滿十
篇而今所入自詠已余三十首六義若
相兼一兩雖可足依無風骨絶妙還有
露羽〻多加偏以躭道〻思不顧多情

眼凡厥取捨者嘉尚〻余持運冲襟伏
羲基皇德而四十万年異域自雖觀
聖造〻書史焉神武開帝功而八十二
代當朝未聽　穀策〻撰集矣定知天
下〻都人士女謳歌斯道〻遇逢矣不
獨記仙洞無何〻卿有嘲風嘩月〻具
亦欲呈皇家元久〻歲有溫故知新〻心
修撰〻趣不在茲乎垂曆乙丑王春三
月云尒

臣家隆た近中将友原雅經等に おかせてむかしいき時をわたすたかきいや
志夫人をきこしめすめに見しぬ神仙の
ことの葉もむかし玉の夏よつゝへあつゝと海
て見ろくりとめ阿まゝ祢くあつめし世
なのくえらひあてまつるとゝろ夜ひ
きれ糸のひとしきちなくすゆふへの雲れ
たりひさゝめかゝれゆへに縁のかゝ花
かうりしきおしこ玉乃みきり風しし
きゝ雅波津のなれをくそすに

こまろをさゝめ浅香山の詞をそつゝて
ふりきあきれをまうてり万葉集より
いまろ奇をいこれをのそかす古今より
このかゝ七代集よいれろ奇をはしまれ
のすることなしあしこれそのに
おそひ筆乃海をくそても宅とふ高乃
阿をとりまゝあにしむうなの釣をのれ
しろたくひきむかしもなれりあら
阿まハいきも又志しろ所なりしへ
てなつめしろ奇ぬこちくまれ

今後撰乃詔をあらあめす五人乃とも
らしをさしめて志るしあてまつらしむ
御なりそのうへこゝろ所をめて何から
見るけることハとをくりろこしれふミ乃
詔をあつぬまゝ後子爲詔ありといへ
もまゝ國やまゝことのそいしまりてのち
吳竹乃世にハ御あめしなむなりけ
このうちミ所にしれ方をのせしるゝふる
さきまくひハ御まと十首にハまれ所ゑ
しまるをいまうれこまえしへるところ

三十首にあままり芝ミれ人乃めて何
つ夫名とりなく心とくむへこさぬしもあり
しれ此へにうへりていつまとまれたけ
まハ森乃柄葉うすけりまけのりく何
かさまそすなりぬることハみちにふまる
たりひふくしてのちれおさまりをうり
見所なるへしとれに元久二年三月二
十六日になむ志るしをまりぬるめをい
やしみ見てをあふとぬる所まり石上
ふるさ詔紙を何といへともなられをく

えてみぶりとをゐろゐろゆへりとみのを
川乃ゐえせぬ君をおこしつまハ霧霜ハ
あらしゆるとも松吹風乃ちるさせを表
秋ハめくるとも定り月のくりなくして
此とれまゐへらんりのハこれをよろこひこ
乃君をあふんもれハいさをしのハ行ら
めるを

新古今和歌集巻第一

春哥上

春のつんをよみ給けり

橘政本政大臣

見よし野の山も霧て白雪のふりは里に春はきにけり

春のはしめの哥　太上天皇

かのくと春こそ空にさふかしあまのく山霧こそ分

百首哥なし　時春哥

武子内親王

山ふかき春とも志らぬ松の戸に雪しくうゆ雪の玉水

五十首哥なし　時　宮内卿

かれにしかれふるさとの雪の中に絶うみしは春はきにけり

入道前関白太政大臣右大臣に給ける時

百首哥よ雨を給けるに立春乃心を

皇太后宮大夫俊成

きふといへハりはしまても行春を都にのこと志ひけるか

雨いしらす　俊恵法師

春といへハ霧にきりなけるまて波まにみしあらち嶋山

西行法師

岩まにしらむもけさかとをそめて苔の下ゆ春のたりとむ也

読人しらす

風ませに雪ハ降つゝしかすかに霞たなひき春ハきにけり

時ハ今ハ春になりぬとみ雪ふる遠き山へに霞たなひけり

堀河院御時百首哥奉りけるに残雪の心

をよみ侍りける　　権中納言国信

春日野の下もえわたる草の上につれなくみゆる春の淡雪

題しらす　　山邊赤人

あすからハわかなつまんとしめし野に昨日もけふも雪ハ降つゝ

天暦御時屏風哥　　壬生忠見

かすかのゝ草ハ緑になりにけりわかなつまんと誰かしめけん

崇徳院に百首哥奉りける時春の

哥　　前参議教長

わかなつむ袖とそみゆる春日野の飛火の野への雪のむらきえ

延喜御時屏風に　　紀貫之

行てみぬ人もしのへと春の野のかたみにつめるわかななりけり

述懐百首哥よみ侍りけるに若菜

皇太后宮大夫俊成

沢におふる若菜ならねといたつらに年をつむにも袖ハぬれけり

日吉社によみて奉りける子日哥

さゝ波やしかの濱松ふりにけりたか世にひける子日なるらん

百首哥奉けり時　　藤原家隆朝臣

苔川のうち出る波も都へ来て川嵐に雲の山風

和哥所にて開路鶯といふ事を

太上天皇

嵐乃なけとも いまた降雪に松のしたるさ和坂乃山

堀川院に百首哥奉きり時秋雪の心をよ

み侍けり　　藤原仲実朝臣

雲さそ ハ花とも みまとかた 思乃松のうちに 淡雪そふ

角いしらす　　中納言家持

まれりし花ゆもいまたしりは小松か原ハ淡雪そふ

今更に雪ふるめやもとけるふの日の雲日と都は物を

讀人不知

凡河内ミつ

いつまとうむとハわかむ故に雲日の原に小まて消ぬ雪

家百首哥合修雪乃心を

桜政大臣

雪ハ稀かすミもやらす風雪て雪をしくりの雲の月

和哥所にて雲山月といふ心をよめり

越前

山ふかミ稀きさむし雲乃月雪かれくりの雪ふりて

詩を作らせて云ふ小合作し小水也表
望といふんを　左清門書通具
三鴨江や霧もまゝ見ぬあはれに角くむ程の表風そ吹
　　友原秀能
夕月秋志かみちたし雖波えの所は其葉とこゆる白波
　　春云とそ　西行法師
降つ是高ねのみ雪と表はなり清瀬川の名は志ら浪
　　源重之
抜かえに掬うき程に数雪と花とも見し表はなれて
　　山邊赤人

梓弓表山近く家ゐして殺してきてつゝ鶯は急
　　讀人しらす
抜かえに鳴てうつゝ鶯はなれ白雲にあは雪そふる
　　百首云庭附　惟明親王
鶯の波のつらうちとけて花菓なりしや表を知らん
　　見しらす　志貴王子
岩そくゝあるひの上は子蕨のりえ出る表は如にけるか
　　百首云年しとれ　前大僧正慈貞
天原ふしの煙の表は色の裏にあひく明かの〻雪
　　崇徳院に百首ゝあてまつりける附

菊家ふくこゝろや煙たけむろ乃八鴻のまとり如ん
晩霞といふんをよめる

菊原清浦釣下

後徳大寺左大臣

なこ乃海の家のまよりなかむ遠ハ入日をあらふおきの波
をのこ共詩をつくりて方に合侍に所へ
長望と云ことを

太上天皇

みそせハ山中かすむ所ハ瀬川夕ハ妹と何ぞひかん
桜政太政大臣家百首方合に長暁と
いふんをよみ侍る

菊原家澄釣臣

家ゐつ遠志乃松山なりのくと波に入るなるゝ横雲覚
守覚法親王五十首方よませ侍るに

菊原定家朝臣

長ゆくの夏乃ゆさ橋と絶て巌に入るゝ横雲覚
夜更若まて桜乃も咲侍しさりけり年
よみ侍る

中務

しるゝめや家の宅をなかめつゝ花も匂ぬ長を歎と
守覚法親王五十首に

菊原定家釣臣

大宅ハ桜乃匂ひに家つゝ人ゐ里をそぬ長ゆくの月

題しらす　宇治前関白太政大臣

折られけり紅匂ふ梅花けさしろたへに雪はふれれと

くさきの梅をとよみ侍ける　藤原敦家朝臣

あるしをは誰ともわかす春はたゝ垣ねの梅をたつねてそみる

梅花遠薫といふ心をよみ侍ける　源俊頼朝臣

心あらはとはましものを梅か香にたか里よりか匂ひきつらん

百首歌奉りし時　藤原定家朝臣

梅の花匂ひをうつす袖の上に軒もる月の影そあらそふ

藤原家隆朝臣

梅か香に昔をとへは春の月こたへぬ影そ袖にうつれる

千五百番歌合に　右衛門督通具

梅の花たか袖ふれし匂ひそと春や昔の月にとはゝや

皇太后宮大夫俊成女

梅の花あかぬ色香も昔にておなし形見の春の夜の月

梅の花そへて大弐三位につかはしける　権中納言定頼

こぬ人によそへてみつる梅の花ちりなん後のなくさめそなき

返し　大弐三位

去毎にんをしむるものえにあるをさりれ袖ふまつる
二月雪夜落とひふと紙よみ給ける
康資王母
梅ちらす風をこそや吹へんかまつる雪は袖に乱るゝ
詠しらす
西行法師
とめこゝ梅竪なる我宿をうと紙も人ハ折にそれ
百ぞ奇なりしに春哥
武子内親王
なるあつるゝふハ昔に成ぬとも折れ梅ハ紙をしるか
太御門内大臣家に梅香袖に留と云と
とよみ給ける
友原有家朝臣
散ぬまハ匂ひいりを梅むありとや袖に春風の吹
詠しらす
八条院高倉
独のゝなるあて散ぬ梅むしる斗なる人ハいひこそ
文集茄陵春夜詩不明不暗勝々
月とひふとよみ給ける
大江子里
照りせしくりもそぬ春のの勝月袖に思ひ袖そ
祐子内親王散薫にしみ給ひに女房
うへ人なと作るへきかきり相給して春秋

乃あれいつまかんしかしそひ給
けるに人々おもひ嫌に心をよせ給を
まとも　　菅原孝標女

浅みどりもとひとつに裏つておもひつまみゆる春の月
百首の所望時　　源具親

難波にこそすまぬ波も裏なりうつるを今の勝月にて
桜政大臣家百首の所合より
　　宰蓮法師

今はとて田面の鶴を打絶ぬ勝月数の明なのこそ
刑部卿頼輔所合し給ひしよみ

つゝりしけり　　皇太后宮大夫俊成

こさしへそ海はおつる鴨鶴明てゆくなる明なのこそ
鄙しらす　　読人不知

なにはの鶴の○所よ更て雲ちにまよふ都の空ゆゑ
鴨鶴を　　桜政大臣

三つなる田面の澤とあ川鶴を いなるの風の秋乃夕暮
百首の所望時

鴨鶴いまは乃心あり明に月とむとしたるそおしかれ
守覚法親王五十首の命に
　　菅原定家卿

霜まよふ宮に志賀遠の鶴金の鳴る翅に春雨そふる

閑中春雨といふことを

大僧正行慶

清らくと春のなるめ乃さひしきは思ふにつゝ新の葉

寛平御時皇后宮の歌合より

伊勢

春雨にあやをりみたる春雨や山の緑をなへて深ん

百首の歌奉時

桜政太政大臣

これはなる山の岩ねにむすて昔のそめぬ緑に春雨そふる

清慎朝臣許にて雨中(ゆり)苗代と云ことを

よめる

勝命法師

雨降ハ雨乃まするをいと雨おもしや苗代のを宮に付て

延喜御時屏風に

凡河内躬恒

春雨のなりそめしより春柳の糸のみたりそ色まさりける

勅しらす

太宰大弐高遠

うちなひき春ハきにけり春柳の陰ふむ君に人のやすふ

輔仁親王

見よ此大川の水の柳をとうみては春ハ(めり)きにけり

百首の歌中に

崇徳院御歌

嵐吹岸乃柳のいなむしろ取りしく波にまかせてそみる

建仁元年三月前合小霞隔遠樹といふ
ことを
權中納言公經
高瀬さゝ山田乃淀の柳原みとりも如くなすむ春
百そ前よみ給けり時春乃命とてよめる
設笛の院大輔
春風の霧吹とく絶まよりえたれてなひく春柳の
千五百番前合小春命
夜原雅經
白雲の殺まになひく春柳のつきの山に春風そ吹
藤原有家朝臣

春柳の糸に玉ぬく白露の上にすいく代の春へ見
宮内卿
落くこれ聖への縁乃若草に絶まてこゆる雪のむさえ
見しらす
曾祢よしあ
おもを田のこそのふる絶の事よりも今は春へとひこ給
壬生忠見
やうにとも草は前なん春日聖をそて春の日小紅たなん
西行法師
吉聖山樹の枝に雪ちりてむをそけなる色にも春
白川院鳥羽にたりしましかる時人々山

家詩花といへるんをよみ給けり

藤原隆時朝臣

様むけりまへるんと思ふまゝに日数へにけり（りイ）春の山さと

亭子院の合前　紀貫へく

わるん春の山へにあくれてなかし日をそふもくらしつ

桜政大臣家百首の合に野遊の心

と　藤原家隆朝臣

思ふとちそこ花思ふす行蓋ぬ花の宿かせ聖への鶯

百首の前に　武子内親王

今様咲ぬとみえてうすくりし春にかすめる世ぬしきが

鶯しらす　讀人不知

ぬしてしひおきてなりむる春面に花乃下細いかに見えん

中納言家持

ゆかむ人へん人の志の人春霞立田の山のもの様もれ

花乃前とてよみ給けり

西行法師

よれ山とその志ありの花へ雨をみぬるのむを見ん

和前取りて前にけるまつりしに春の前

とてよめる　寂蓮法師

うつきや高まの様咲にきり立田乃おくにかゝ白雲

蹴しらす　よそ人不知

石上ぬるき都をさそこれは昔かさしゝ花咲にきり

源公忠朝臣

春にのこる○はおもかんかつ山田を忍しも花はみるへく

屋へさくらをおりて人のつゝして約を

まとも

道命法師

白雲の立田乃山のやへ様いつまを花とわきておりん

百首の所を聞時

菅原定家朝臣

白雲乃春は室て立田山小倉のこゝ○にむ白らし

あいしらに

藤原家衡朝臣

吉野山もや繁に白ふらん春にはらぬ峯の志ら雲

和所一和所合に羇旅花といふことを

菅原雅經

岩ねふこうきなる山を分拝て花もいくへ乃紅の白雲

五十首所を聞時

鶴さて花にくらせる木乃より約しとをなき山の月

春にむと云ふを

前大僧正慈賀

菅ちらす人も鶴ぬ春にの霧けき花に春風そふて

千五百番所合に　右清門書通具

石上ふるの様あれらへて春は三里ぬ形見ぬらん

正三位季能

花そみつ花の芝草ふゝ分て吉野の宮の春乃明更

菅原有家朝臣

朝日新旬つゝ山の桜花つゝ重なりてさえぬ

雪かとそ見ゆる

新古今和歌集巻第二

春哥下

秋河和哥所にて九十賀し侍しおり

屏風に山に桜咲たる所を

太上天皇

桜咲堂に山鳥の志たりおのなりし日をおもぬ色成

千五百番哥合に春哥

皇太后宮大夫俊成

いくとせの春にあふをけしきぬ衰とも見へ見えしの花

百番哥に

式子内親王

もうなくて過ぎにしかたをうそふきにはむかし物思ふ雲そへにまさる
内大臣に給けるに時望山花といふ心をよみ
給けり
京極前宮内大臣
白雲の為なかひく山の山様いつ重を花とゆきて折まし
祐子内親王家にて人々むかしよみ給けり
權大納言長家
花のうへにおまさる家立まるよひ宮内へ白ふ山様が
聞しらす
山邊赤人
百姓の大家人はいと海おもや様かきてきふもしらす
在原業平朝臣

花にあぬなけきはいつ世かとゝもふのこゝろ所ハ
凡河内ミつ
いとやまと祢しはるまきり雲のよりのかれちりのこゝ夢にみて
いせ
山様ちりてみ雪にまかひなはいつ重かむと雲にとなん
貫之
我宿乃物なりなし様花ちりをはえそそめさりけれ
寛平御とれ后の宮の寄合り
讀人不知
家ゝ内雲の山へは様むあらすなとや當乃なく

題しらす　赤人

春雨はいたくな降そ様なきまたみぬ人にちらまし

中納言家持

原にはむはなつみにしかれ山の様はまたしらしとなり

黄く

花のかに夜はふくかにかり木の下陰の風のまふく

皇太后宮大夫俊成

風かよふね覚の床(袖)のむのにかりの枕の春のゆめ

守覚法親王五十ぞ所よ雨を給けるに

菅原家隆朝臣

この程はしらりしぬも玉鉾の行かふ袖はものそすな

椅政大臣政大臣家に五十ぞ所よみ給

けるに　皇太后宮大夫俊成

みやこんなれてこの様なり花の雪ちる春の明かの

花の所領給ひに　祝部成仲

ちり地にはおかつるなさは春霧なるいく山の様之なり

山ち(里)に雨かりてよみ給けるに

能因法師

山里の春の夕暮きそこれは入れの鐘にむそ落けるに

題しらす　恵慶法師

様ちる春の山へはうりきり世をのがれにしかひもなく
花見給ける人にはそ望てよみ給ける
康資王母

山様花の下風吹にきり木のりしことの雪乃むらきえ
花しらす
源重之

春雨はそれかゝる雲乃花やこそすれつゝ涙に花そ殺けり
鶯金の鳴るを風や花そふんる色のこれむも紙手
百首の奇合し給し春乃奇
源具親

時もあまた雨のむれ鶯乃別さへ花ちる時のみよしの雪
源山花といふ心を
大納言經信

山ふかき枝の村立みてぬまてたのへの種に花のちるか
堀川院御時百首の奇を事きるに花の奇
大納言師頼

木の下の苔乃緑もみてぬまてやへ殺ふきる山様か
花十首奇よみ給きるより
左京大夫あきまけ

棲まてたのへの様殺ことはあるひく雲とこそや
花落宮掃といふるを
刑部卿範兼

花ちまこハ問人まれにあはそこいとひ風の音のこそすゝ
むしらす　西行法師
なかむとそむまもいくゝる似ぬまハちゝ別ゝ遠かれ
越前
山里の庭より外の花もかむ花ぬやとへもこそとへ
五十首奇なし中に湖上花を
家内々
花ひそふ記しの山風吹ふかりこ記り舟乃記ゆまて
開路花を
お坂や梢乃花を吹ふに嵐そうすむ開の枝むし

百首奇なし小長奇
二条院さぬ天
山ちみこ〇乃嵐に花の月にあまき海内ちこの雲
百首奇めしける時長奇
崇徳院御奇
山ちゝ岩ねの梅ちる時にあまれた夜なつとそ見る
春日社奇合とそ人ゝ奇よみ給ける
刑部々頼惜
花まかふ花のよそめハ吉野山嵐にはらく峯の白雲
寂勝四天王院の障子小よしの山書

ある所

太上天皇

見よ此ゝ寄ねの様殿にまゐり嵐も志るき春の時の

千五百番の合なり

定家朝臣

様々の庭の春風詠りしとゝそ人の雪とあふこえ

一とせ思て大裏の花見に御ありて待し

小庭にちりて待しむを硯の下にふへ今

様政の許につかはしけり

太上天皇

きふたなとも庭を盤にうつ花消ましかりとも雪かとも

みよ

返し

様政太政大臣

此そ里ぬ人の為とや我きんおもとりさ花の花の白雪

家のやへ此くらをたらせく惟明親王の

許につかはしけり

式子内親王

庭へ白ふ新たの様ろろひぬ風より此きにとふ人哉

返し

惟明親王

つきぬ人にかふまそにやへ様とへともいとてるつゝ

五十そ方なし時

夜原家隆朝臣

様も夜ろうくら白雲ぬ雪えて里なき峯の春を

題しらす　皇太后宮大夫俊成

恨まや浮世を花のいとひつゝ風あらはしとしひかるをは

後徳大寺左大臣

たゞなきをかなしいはし樣も咲ては散ぬ所をれ世中

入道前罪日太政大臣の家に百首の所に

せ給けり時　後恵法師

なりむへきのこりの雲をうそふまはいむとてもふもちる波哉

花の所とて讀る　殷富門院大輔

むもしみまうまん雲は思ふよ咲ちるたひの心にしを

子晋叢所合に　左近中将良平

散花の忘るゝこれみ子の雲そをとしのこせ雲の山せ

落花と云ことを　藤原雅經

花にそふなこりを雲に吹とめて志遠は白へ雲の山風

題しらす　後白川院御所

おしめ共散ぬそ雲は樣も今は梢をなりむいりそ

殘雲の心を　樣政太政大臣

吉野山花の所で給ふえてむなしき樣に雲風そふて

そいしらす　大納言經綱

所で乃花の盤は遠ぬまとて面影さしぬ雲の宮哉

百首の所中に　武子内親王

花ハ花そのかゝとなくなりむしハむしゝ遠き空に雲雨そふる
なのく実れ春の月に月ハまつらち若月輪
寺に花見給けり日よめる

清原元輔

たゞ雨あ小おしいのこゝろむ山様こゝ望て白へ小ふの形見
曲の裏をよめる

中納言家持

唐人の糸をうへて何そふて雨ゝふそわりせこむかゝせよ
紀貫ゝ曲水裏し給ゝる時月入花灘
暗と云ことをよみ給けり

坂上是則

花なりす漱をもみるへさ見る月のわまして入ぬる山れをちこ
雲林院乃ほくしみ海りをうに見る花
をそくいつゝ小ゝ桜のこゝろとりけるハ

良暹法師

鶏つゝ花も我身もたとへて後の雲とも見えよ琴ね
子五百番方合よ

寂蓮法師

心ひとつ鳥ハ古巣も形もしらんなれぬるもの紀れ々くれ
花よをり長うしみれ雨をなれハ花乃紀とふ雲の山風

檀中納言公經

雲ふく鶏いつさの山れ小ゝのみし雲れ色そのこゝろ

百草寺連歌

桜政大臣

初を山ゝ雲ふ花に春ハ雲ゝ雲ゝ花にのこれ

菊原家隆

吉野川にしの山峡咲にまきりみねの桜ハ花ゝそ

皇太后宮大夫俊成

駒とめて猶ゝ山峡乃花の露そふ井ての玉川

堀河院御時百草寺しゝ時

權中納言國信

岩ねこす清瀬川のもやれハ雲ゝ折りくる岸の山ゝき

花しらす

原見王

蛙なく神なひ川に新みえてしとや咲らん山ゝきの花

延喜十三年亭子院寺合り

菊原おきゝ風

足引乃山峡の花咲にまきりみてのかゝりしとや咲らん

花しらす

赤人

恋しくハ形見にせんと我宿に植し菊波今さかりも

龍香舎にて菊花裏絡けるに

延喜御寺

かくてこそみまくかなれ万代をかきて匂へる菊波の花

天暦四年三月十四日菊薫にわたらせ給

て花おしませ行けるに

天暦御前

内と過てみ里ともおぬ花なるものゝ内におきそふ事も

清情公家屏風より

貫之

蕾ぬとは思ふ物から花の花さける宿に雲そ見えき

花乃松にかゝれるをよめる

縁なる松にかゝれる花なる里とをのゝ法とそ花はきそ

雲の蕾つゝ実方朝臣乃許につゝかし

けり

花原通信朝臣

花ゆゑ花りやあるとうちむ里てみ山かれを見てか

修行し給けるに雲の蕾にかゝけり

大僧正行尊

木の本の梅をいまは蕾ぬ也雲し蕾なるは誰かとひえ

五十首奇事し時

寂蓮法師

蕾て行雲のみなとは思ふねた家にたつる宇治の法来

山家三月盡をよみ給けり

花原伊綱

こぬまてを花なる人のまゝれつゝ雲を蕾ぬるみ山への里

新古今和歌集巻第三

夏哥

題不知　持統天皇御哥

春過ぎて夏きにけらし白妙の衣ほしてふあまのかぐ山

素性法師

おしめ花と雨しぬ春もあるものをいたぬよきてうる夏衣かれ

更衣を読侍けり　前大僧正慈愛

夏ぞ花の春なれ木のかに立とやまれ夏衣ぞ

春をしくりて明るゆとしいふことを

源道湖

夏衣きていくかふる如ぬ人のこれるむハ春ふも夏ぞ

夏乃ましめ所とそよみ侍けり

皇太后宮大夫俊成女

おふもうまハ今川世中の人の心乃むそめ乃袖

卯花如月といへる心をよ海せ侍けり

白川院御哥

卯花のむらく咲るかきねをハ雲まれ月の新とそみ（とこそみまし）

もしらす

太宰大貳重家

うゐ花の咲ぬる時ハ白妙の波りて少へるかきのとそみ

秋院に侍けり時祈あらまそ

武子内親王

忘めやあふひを草に引結ひけり君の聖への霧の曙

あふひをよめる

小侍従

いかなれはその神山のあふひ草ゆへ[illegible]天二葉成ん

家勝宮天王院の障子に浅香のぬま

書しる所

菅原雅經

聖へはいまた浅かの沼にうる草ゆへみつまゝに成る比哉

崇徳院に百首を奉けり時夏部

待賢門院安藝

様あきのおふの下草忘られて何そ別しむかなれは

曾祢好忠

あいしらす

範茂庭の本葉を茂あひて何まてる月の影を稀なり

りにくと招し人の絶はしを草葉に付て思ふ所れ

菅原元恵

友草は茂りにけりな玉鉾の道行人を結ふかりに

延喜御哥

夏草は忘れり小れと時鳥なと我宿に一ふもせぬ

柳本人丸

なくこ忘とえやは思ひぬ時鳥初うれもの名をいふれて

賀茂に由して侍けるに人の郭公なかむと

ゆきつ時のまゝに思ひ木を忘れかしく
みえ侍けまいは　紫式部
時鳥聲詩程ハかゝる思の森の雫に立やぬまゝ
賀茂に籠しけり嘘郭云時なれは
弁乳母
郭云みゝいつなり初聲をいつまの宿ぬ事れかきくらん
あいしらす　讀人志らす
さ月やゝ卯(まい)む月来時鳥きけとも思ひ寄ぬ人を
なのかま忘て時やさ月やゝ神なひ山のやま時鳥
中納言家持

時鳥一こゑ時ていぬる来ハいそゝ人乃いかやまくぬる
大中臣能宣朝臣
郭云時ていつ足曳乃やまとなりしこ咲よ老しか
大納言經信
二こゑと時ハ也きゝハ時鳥衣にしきこそてねハせん
詩客関時鳥といつ心を
白河院御哥
時鳥まゝこゝろと老ぬ思ふ事ハこぬ人をまつ我のこそ
あいしらす　花そのゝ左大臣
きてしを粉そ稱しまぬ時鳥詩し来ゝ此ゝ思ふ

神あらふく 附鳥をきて

前中納言 通房

卯花のかさねなる孫と附鳥月のかつらの色になるや
入道前実自右大臣に給ひて附百首の奇
よませ給けるより 附鳥奇

皇太后宮大夫俊成

昔忍ぶ草のいとりのよろ乃海に渡るそへり 山部云
海そこく花たちむかに風ふきて山附鳥雲に鳴や
きいしらす 乃うみ
きうてたゝねなほ捨を附鳥なりくなるやよかの一
部

紫式部

あう里も同りやくらと附鳥ふのかきり給そまひは
寛治八年前太政大臣高陽院奇合に
部云と

周防内侍

秋とかきの給かねの山の附鳥雲ぬれよそに一急そ安
海亀附馬といふことをよみ給けり

按察使云通

二部ときかすいそ附鳥いく秋あしのかりなとも
百首の奇なし 附度の奇の中に

民部 四範光

時鳥なを一こゑは思ひよおひその森のよりの昔を

郭公をよめる　八条院高倉

一聲ハ思ひそあへぬ時鳥なれ時の雲なまよひに

子五百番方合に　桜政大臣

五月のつまるくみしし月ハ出ぬ山時鳥待来なるに

後徳大寺左大臣家に十首方よみ侍

けるによりてつかうしまつる

皇太后宮大夫俊成

我心いかにせよとて時鳥雲まれ月の新になるらん

時鳥の心をよみ侍けり

前太政大臣

時鳥鳴ていつさの山ぬけて月ゆへかりをうしめしきか

檀中納言親宗

五月の月ハまたぬに出ぬ里ハ杉山ふかれなしきすか

森間郭公といふ事を

藤原保季卿

ゐにきり佐田の森の時鳥なれ鳴を袖にあつて

尋しらす

藤原家隆朝臣

いかにせんこぬ来あまたれ時鳥まちしと思へハ村雨の雲

百首方をしに

式子内親王

都へりして雲ちにむせふ時鳥波やそくくよひの村雨
　　小晋書寄合に　　椎中納言三種
時鳥なをうとまれぬ人我なりなく里のよその夕雲
　　題しらす　　西行法師
こさかすともこゝをせにせん時鳥山田の原の杉の村立
郭云ふれ峯より出にけりと山田をそに都の都ちくら
　　山家暁時鳥と云心を
　　坂徳大寺左大臣
をしふく筏の夜座のかりのとを明るこゝ時郭云れ
　　五十首歌人々によ雨を待けり時夏の寄
　　とてよみ待けり　　桜政左政大臣
うちしめりつゝやめそかりつ時鳥鳴やさ月の雨の夕雲
　　述懐によせて百首よりの見ん待きり時
　　皇太后宮大夫俊成
きふはしあやめのねさへけそへて乱そまはり袖の白玉
　　五月五日くさ玉つくりして待きり人々
　　大納言經信
あらなくに菊は菊の色くはかりにかりなる秋に
　　つれもなくひにしみ待けり此さ月六日のつ
　　ともになりめありして釣になりれ孫を

けてみく紫式部につかりけり

上東門院小少将

なべて世のうきにあるにあやめ草をしまてうけはいかゝん

返し

紫式部

何ことにあやめはわてをしふも粉袂にのまるねそ殺せる

山畔早苗といふる心を

大納言經信

早苗とる山田の畳ひかりまいかり引志めなるに家そこ[illegible]

釈阿九十賀行とせ給し時屏風に五

月雨

桜政大政大臣

を山田に引志めなるはかちはへく桜やさしめん五月雨乃比

多いしらす

伊勢大輔

いつ斗田子のりすそもそのうらん雲まもみぬ時の斉

雨

大納言經信

三鴨河の入えはまこも雨降はいとゝ志をしてうる[illegible]

前中納言通房

まこもかる淀の澤あふつきれと庭まて月の影はなみかり

雨中未盤と云んを

菅原基俊

玉かしは義りにかりな五月雨に菓りなれ神の志めなる

[illegible]

百首ニ方よませ給けるに

入道前関白太政大臣

五月雨ハ雨かのかたしまこも草かくれ也波の下に折見

五月雨乃ふを

藤原定家朝臣

玉かしは程行人のとゝても絶て程ふる五月雨の空

荒木田氏実

五月雨乃雲は後まを稼つ宮よりほに月を待ち

百首ニ方連時

前大納言忠良

檜嶋そとりの木陰霧おちて五月雨ゆゑ風流過

五十首ニ方連時

藤原定家朝臣

五月雨乃月ハつまなれみ山より独も出ゆるさ寺が

大神宮に奉し夜方中に

太上天皇

時鳥雲ゐはるそにゐるゐ之れぬ忘ひの五月雨乃比

建仁元年三月方合に雨後時鳥といふ

ことを

二条院さぬ氏

五月雨は雲まの月乃晴行を志りし給ける郭氏

見しらす

皇太后宮大夫俊成

誰かの又花さらむ心ひ出ん我も昔は人となりせハ

右清門書通具

行末をあまたしたへとてタクせに契りをかむ宿の立花
百首の所なりしとれ夏哥
式子内親王
咽こむ昔を今としたひねの夏の花に白ふあらむ
前大納言忠良
梅の花ちりの思ふ草昔をかけて露そこゝるく
五十首所なりしに
お大僧正慈賞
さ月やみしかれよりのこゝねに花梅の袖にしきし
知しらす
よみ人不知

鶯ぬへさ人ハ新ものなりてふそれとかゝる庭の夏ちむ
時鳥花ちむ花のをとめてなくハ昔の人や忘しき
皇太后宮大夫俊成女
梅の白ふあらりのこゝねハ夏も昔の袖のそすう
友原家隆朝臣
ことしより花咲そむる梅のいかて昔のかゝらん
守覚法親王五十首所よませ給けり時
藤原定家朝臣
夕鶯ハいつ里の雲の余波とて花梅に風のふくらん
花梅より時鳥乃なきけるハ

増基法師

時鳥花橘乃当ハりにあらや昔の名ぬ如ん
堀河院御所ニさしいの家にて国五月
郭公といふんをとのことも行ふまゐり
けるに

権中納言国信

時鳥さ月みな月まれなるこゝやまちふ聲そ宮に出る
そいしらす

白河院御所

庭乃面ハ月もしぬまてぬ小かり梢に夜ぬきぬりて

恵慶法師

我宿乃そとりに毎そうなしぬの志きにしまむ夜公にかり

桜政大臣家百首に合に鵜川を
よみ給けり

前大僧正慈賀

鵜かひ舟長とそみつ武士のやそうち川の夕闇の宮

宰相重法師

鵜飼舟こゝ漸さしこす程なれやむまをかれゆく簾の新
千五百番に合に

皇太后宮大夫俊成

大井川のまさ行うかひ舟いくせに夜ぬまをおもすん

菅原定家卿

久堅乃中なる川のうかひ舟いかに契りて闇を行ん
百首に寄生し時

桜政大臣

いさりゆへの昔の光なのみそしおやの里に飛蛍ゝ那

武子内親王

寄ちかき竹葉をさむ風の音にいとゝみせかれたる竹の葉

鳥羽殿にて竹風秋涼といふことを人々つ

かうまつりしに

長安檀大夫公継

寄ちかれいさゝむ竹をせふけハ雅におとろく夜の葉

五十首を奉し時

前大僧正慈禹

結ふ事に新しくも月山乃ぬれおそも月のうつきに

家勝宮天王院の隙子に清見ゝ開出たる

所を

權大納言通光

清見ゝ月ハつ重なれおまの中を雨こそ思ふむ波の音

家百首を奉合に

桜政大臣

重ても涼しきまり夏衣うすき袂にやとる月かけ

桜政大臣家にて詩奇合けるに為道

冷月秋といふことをよみ書る

有家朝臣

しきさハ秋やかへりてまつを川ふるかの人の松乃下陰

起しらす

西行法師

路の人に志あるゝ柳かけ志りしとそこそ立と雨りつ重

よられつゝ壁面せの草をかけろひて涼しくりる立の

元

崇徳院に百首をたてまし時

菊原清輔

なのつゝ深しくもあるゝ夜衣ひもゝ夕嵐の花の花に

千五百歳所合に　權中納言公經

霧をうゝ庭の玉にしかなひき一村ゐぬ夕立の雲

雲隔壺望といふんをよみ侍ぬる

源俊頼朝臣

さとちにハ夕立をしらしめたゝのおまはれく山雲ゝ侍

夜の月を待つ　從三位頼政

庭の面はまたゝかぬに夕立の雲さりけなくすめる月哉

百首所中に　式子内親王

夕立の雲もとゞまらぬ夜の日のゝこふく山に日くれ忘

千五百歳所合に　前大納言忠良

夕ゆふひさすや庭の柴の戸にさひしくもあるゝ日くれの

百首をたてまし時　頼政大臣

秋ちかきしきの森に鳴せしの波の霧や下葉そむらん

二条院さぬき

鳴蝉の聲もはしきゝ夕嵐に秋をかけたる森の下蔭

堂のとひまたるを見んとくよめる

壬生忠見

いつちとうよ海ハ雲のかうらん紛て志てぬ草の花を
五十首奇事し　時
　　桜政大臣
雲とふ聖澤に蔵るおしの森のよるく下にかよふ秋風
刑部で頼憚奇合し　侍けるに納涼を
よみ侍ける
　　俊恵法師
楸おしつるに山の蔭に悲ひて吹けるを妹の夕を
瞿麦露滋といへることを
　　高倉院御哥
白露乃玉りて沙へる海を内に光はへそふ床安の花
夕貞をよめる
　　前大政大臣
白露乃なさけをさきることのやすめくみしを夕貞のむ
百そ奇よりけるの中に
　　武子内親王
あそうれの形ハ萩にとゝもまれハ出ぬ秋そ下にとふ
友奇とてよみ侍ける
　　お大僧正慈愛
雲海よふ夕に秋をこめるゝ世もなに出ぬ萩の上に
大神安に事し　安奇中に
　　大上天皇

新古今和歌集巻第四

秋哥上

題しらす　中納言家持

神なひのみむろの山のさをしかはしきに秋のしらせ

百首哥よ初秋のこと

崇徳院御哥

いかなれ荻のもむきのこゝろにそゝや妹とそ風も寄

荻原季通釣臣

この秋ぬる秋のまゝに秋ぬきにしきに釣けの風の時ゝ雲の紋

文治六年女御入内屏風より

後徳大寺左大臣

いかもさく葉の里にしきへとも時ゝにかゝる山おろしの風

百首哥よみ給けゝ中に

荻原家澄釣臣

時ゝにしたゝんれしきひし清の田の生田の森に秋ぬきにけり

寂勝宮天王院の障子に高砂書しる

取を　藤原秀能

吹風のさしよみてね高砂の松のへの松に秋ぬきにけり

百首哥奉進時　皇太后宮大夫俊成

伝見山松の陰よりみそせにあくる田面に妹風そふく

守覚法親王五十首歌よ御世 約書御
とれ
家隆朝臣
明ぬるか衣手さむし菅原や伏見の里の秋の初かせ
千五百番歌合に
桜政大臣
源草の露のよすがを契りて里をかけれは秋はきにけり
右清門書通具
衣又いかに思ひん神の露整原の世に雄はきにけり
源具親
愛宕の社の上に通ぬや露を勇のあきのはつ風
彫昭法師

水莖の思ひくまて菓を色付てし鶉うらふ遠秋の初かせ
越前
秋はさんよりなくは露を袖のわかるとも思ひけれ
五十首歌奉し時 妹命とて
菅原雅經
明るまてよそに思ひし下蔵の末菓の露に秋風そふく
彫しらす
西行法師
なしるへて袖を思ひぬ人に問へ心をつくる妹のすゝ世
衣いかに菓菓の露のわからん妹風立ぬ交城のくら
崇徳院に百首奉しとれ

皇太后宮大夫俊成

永濱つき樹し山田に到るまゝ又袖ぬるゝ秋はきにけり

中納言中将に侍けり時家に山家早秋

といへるんをよませ侍けり

法性寺入道前実白太政大臣

秋雪や音乃山の里なれて雉きにけりと雅らしまし

影しらす

中務卿具平親王

夕薫は萩ふく世の音まはりしといへるに侍見せられん

後徳大寺左大臣

夕侍ましは萩乃ひむきを吹風にことそとも多く波落

ぬり

崇徳院に百首をすけり時

皇太后宮大夫俊成

萩の葉も契ありてや秋風乃なとつまそもりけまと

影しらす

七条院権大夫

秋きぬと松吹風も志らせけりなるに萩のうつくなる

影をはくつまそうまこれ方よみけるに信田の

妻の雉風を読る

藤原經衡

日をへはく音こそまはまいつまなる信田の妻の子えの秋

百首の方に

武子内親王

うたて村の鈴きの袖にうつるやなりす扇乃妹の初せ

題しらす　　作ゝ

手とあゆくなるす扉乃をさ取三つ斗に秋風そ吹

大戴二位

秋風ハ吹むまへ丸白露乃乱てをかぬ草ゆそなさ

曾祢好忠

鈎かゝき萩のうゝれ露ゝれハやゝかゝ遠秋の初せ

小野小町

吹むまゝ風ハ昔乃秋なるしかりしにもよぬ袖ハ露ハ

延喜御時月次屏風に

紀貫之

大宮と我となりめて長星ハつま待来さへ独かもねん

題しらす　　赤人

此夕降ゝる雨ハ長星ハと海ゝ無乃かひのしつくゝ

宇治前開白太政大臣の家にて七夕ハんを

よみ侍けるに　　宇治前開白太政大臣

契きん程ハ志らねと七夕の程をぬ今ゝの天ハ川風

権大納言長家

今をへてまむへき宿の池ハ星合乃氣もなきやさん

花山院御時七夕ニ所ゝまつりけるに

菅原長能

袖ひちて我ゆゑに結ぶ面に天津星合の宮をみるか

七月七日七夕祭所にてよみ侍けり

祭主輔親

雲まより星合の宮をみるこせ（あかむきつ）は志川の水の秋の川波

七夕前とそよみ侍けり

太宰大貳高遠

七夕乃おまの衣うちかさ○ねる秋はしこさ秋風そ吹

小弁

七夕の衣のつまかんして吹かへ返そ秋のまつ川の秋

皇太后宮大夫俊成

七夕乃と浦ゑ永ぬちのまにいく秋かさの露の玉ゆさ

百首の秀中に

武子内親王

なかむきは衣手はしく久かたの乃おまのうちの秋の夕言

家に百首よみ侍けり時

入道お宮白太政大臣

いつ升身に志ゑぬれん七夕のつま侍よひ乃天の川せ

七夕んを

權中納言公經

星合乃夕はしき天川かみちの橋を渡る秋の夕

侍賢門院堀川

七夕のあふを絶せぬ天川いつなる秋のまつりそめけん

女御嚴子女王

わくらはに天の川なみよりなりしかくる宮まは海かせをもとめ

大中臣能宣朝臣

いとしくしたひけぬれ七夕の別の袖にをけるしら露

中納言兼輔家屏風より

貫之

七夕はいまやわるゝ天河川霧なりてみ鳥なくも

堀河院御時百首寄中萩をよみ給ふ

前中納言匡房

川水に麻のしらみかきてかりうれてなりまぬ秋萩のむ

むしらす

従二位粉政

かり衣我とはしらし露しきれ聖原の萩の花に住て

檀僧正永縁

秋萩をおりてはしら月菓のむまり衣露にぬるとも

守覚法親王五十首寄よませ給ふに

彤昭法師

萩の花ま袖にかきて高嶋のたのへの宮にひまふ花

あいしらす

祐子内親王家紀伊

なく露もしらしなく秋風にしられて咲るまれ萩

人丸

秋萩の咲ちるのへは夕露にぬれ迄ぬきませ秋ハ深ぬとも

中納言家持

さをしかの鳴立をのゝ妹萩に玉とみつまそをけり白露

凡河内こゝ

秋のゝを分行露にうつりけり我家手ハもの(もり)そすゝ

小野小町

誰とうもまつちの山の女郎も秋とちきれるへそあはし

菅原元真

女郎花聖への原にしひいそゝやとりし出の聖や惑(ふ)き

千五百番哥合に　左近中将良平

夕作れは玉ちるのへは女郎も枕さしめぬ秋風そふく

蘭とよめる　公猷法師

友稀ぬしは誰とも白露乃こゝ見て白ふのへは荒

崇徳院に百そゝ事けり時

清輔朝臣

うす雪の籬の花乃鳴志めり妹ハ夕と誰ゆひ見ん

入道前関白太政大臣右大臣に給けり

時百そゝ哥よませ給きつり

皇太后宮大夫俊成

いとうや袖ハ志ゆ迄聖へに出て昔も秋の花ハ好と

籠紫に結ぶる時秋の聖をみくよみ給
けり
大納言經信
花見にと人やりなるぬ聖へにきてんの限はしつゝ
あいしらす
曾祢好忠
おさそこんと思ひし程にかきたり露よりもなる撲の花
貫之
山川のかきなに咲る撲は思のゝめなくてみるよしなし
坂上是則
うゝ海にあさちる原ぬるかやの乱て物を思ふよるれ
人丸

さをしかれ入聖のしてき初お花いつしかいりつゝ秋を見
よこ人しらす
小倉山林麓の聖への花薄なのかにゆる秋の夕暮
女御巌子女王
なのかにも風ふかなんも薄むすれつゝ露にぬるとも
百三十六歩に
武子内親王
花薄まゝ露ふるなにいそはなりぬしと思ふ秋の聖を
桜政太政大臣百三十六歩にまゝ給けるに
八条院六條
聖へ毎に花をとつまゝ海の秋風をあらこにもなひくも薄

和歌所にて命合に鈴草花といふことを

左衛門督通光

明ぬとて聖へより山に入廉の鈴吹をとる萩の下せ

詠しらす

前大僧正慈鎮

月にと海のしひと萩のうへにしけるしの葉の宮

景徳院御時百首歌めしけるに萩を

大蔵卿行宗

月の程をしひけるの葉の上葉に風濃也

秋命よみ給けるに

源重之女

秋はてゝ物をとてしへ霧かゝ海萩のうへにて風につきても

堀川院百首歌を奉けるとき

藤原基俊

秋風のやうにて寒く吹なへに萩のうへに葉をしきて

百首歌を奉時

橋政大臣

萩のうへにふけは嵐の妹なりと鈴きるよはさとしの

なしなへてしひしとれ数くに狩ゑこまにつ秋の夕の音

詠しらす

葉かゝ海むなきそれ秋をこそおもえ海事海神の夜

家に百首歌合し給けるに

掛ふはてゝ海霧やは袖よをくらかめてきり取雄の夕雲
おのことも詩をつくりて所に合詩しに
山路秋行といふ事を

前大僧正慈鎮

みぬちやいつより秋の色なるんみさしし雲は夕雲の色
あいしらす

宰相法師

ひしさはその色とも分かるきり桂の山の雄は夕雲

西行法師

ふるれ身にも衰はしられけり鴫の澤の秋は夕雲

西行法師

しらめて百さ所よませ詩
けるに

菅原定家朝臣

みすさせはむもの紅葉もなりきり海の笛やは秋の夕れ

五十首奇連歌

藤原雅經

あへてやはしひありともいくせん蘆の宿は妹の夕雲
秋乃奇とてよみ詩けるに

宮内卿

しふとしてそれとはなれ掛を妹の夕をふまそしふ

鴨長明

秋風のいとりいてゝぬ袖はおしこそ我かゝは霧の夕雲

西行法師

おもひかゝる秋ハいつなつ夜のあまはいまゝ夜ハ物のかなしかるへし

武子内親王

それなりし昔にもあらぬ雅風にいとゝなりめを幾のさき

老しらす　　菅原長能

日くらしの鳴々蕭そうりきいつもはきせぬ志ひ来れ

和泉式部

秋くれはとれハ乃山の松風もうつ汗に身にそしみる

曾祢好忠

松風のよりに吹くる青雅山なるの草木のとけるき

はりこ

曉の露も涙もとゝ流して悲る風の聲そのこれる

法性寺入道前実自太政大臣家ニ合

よ野風　　菅原基俊

高倉乃聖ちの志の原来さらはそゝや末柏々ふ吹ぬ也

子五百番ニ合ニ　　右衛門督通具

深草の里の月氣さひしはもまゝ也まゝの聖の松風

五十首ニ有し　　村間月と云ことを

皇太后宮大夫俊成女

おもひきの森乃末乃とりはてゝ人事のめなる雅風の月

守覚法親王五十首ニよりまゝ也給けるり

荻原家隆卿臣

在明乃月鶴宿(かとり)の神の上に人たのめなるよひの猶書

桜政を政大臣家百首に言合り

藤原有家卿下

風流のおさちの末の露にあらはれぬ事にやとりもそぬよひの猶書

多云漸まで十首言をしに

左清門豊通光

むらしのやゆき大秋乃ゆそそなきいつなる風の末に吹ん

百首に言をしし時月命

前大僧正慈円

いまそう渡くりして月はみ秋鶴えそも雄そ忘しき

武子内親王

なかめ絶ぬ秋より初の宿をも雲にも山にも月やまむ

もしらす

兎融院御言

月新のまつ嫌風とふきけり心清しに抽をこそ忘

三条院御命

足引の山にあるこにまむ人はまたてや秋の月を見

雲間嶽月と云ことを

堀河院御言

岌嶋やうる雲山の雲まより光にしそふ言ひり此月

題しらす

堀川右大臣

人よりもこの限なりあつて月は雅ともわしりの山へ

橋為仲朝臣

あやなくもくりぬよひを肱ぬ悪ふの里は秋のよ月

法性寺入道前関白太政大臣

風吹は玉ちる萩の下露にまちかなくやとる聖への月ぬ

従三位頼政

と秋あまとまて吹風を身にしめて吉のくあけの月をみらん

法性寺入道前関白太政大臣家に月を

おまくこよみ侍けるに

太宰大弐重家

月されは思ひそあへぬ山寺みいつまのきの雲にうあらん

和哥所合湖邊月といふことを

菅原家澄朝臣

まかの海や月の光はうつろへは波のむにも雄はみてくり

百首哥奉し時

前大僧正慈恵

雲ゆけは煙もあらし志かの海のうらみなそそ秋はの月

題しらす

皇太后宮大夫俊成

とかりの秋にはあへぬ波ぬ月のうつるもかなる光り

家澄朝臣

なりめてしゆふをさひし山ゝ月の都の時ゝ此宅
五十首寄事し時月前草花
橘政長政大臣
歴々の本ゆゑ小萩咲しよりよるく庭の月をうつす
建仁元年三月寄合山家秋月といふ
ゆすをよみ侍しに
時しも雲ゆ歴々人は喜りせくみ山の月に秋風をふく
八月十五夜和寄不可合に深山月と
いふことを
深くぬと山の庵の柴の戸にさそれ来る月はさひしき

月前松風
宰相法師
月は程りぬ来る程吾の松をはらして松風をふく
鴨長明
なりむ里は子ゝに掬ふ月に又我身ひとつはみ(のり)の松風
山月と云ことをよみ侍けり
藤原秀能
足引の山ちの苔の露の上に稀光来ふるき月をみる
八月十五夜和寄不可合に海邊秋月
といふことを
家内
心あるをしまれ所さの秋ぞ月やとれとぬ里ぬ掬ら

宣秋門院丹後

忘しな難波の秋のよはの月をことうらにすむ月みるも

鴨長明

松嶋やしかくむあまの妹の袖月は拂ふなるひのうらは

七条院大納言

ことゝはむ聖嶋かさゝのあさ夜波と月とにいてしたまて

和哥所命合に海鳥と月を

秋のよの月やをしまの天原的にてちられおきの狗子

前大僧正慈円

うれ身まはなるむらひとなりしまりしまりの秋のよ月

大江千里

いはくにつこゝひの月ぬりるへき小倉の山とはをやふん

源道湖

心とそあくらまにそれ秋のよの秋ふつき月を独みより

上東門院小少将

かはしなしたりしぬと秋のよの月鶴程のんとりは

和泉式部

毎のめさるへはなけまと妹のよの月みくぬへきんちそ

月をしそつらしけり

友原範永卿

見るたへの袖とそ志なる雄のよは月にいかなる新そ見

返し　　作ると

身にそへる新とこそ見れ秋の月袖にうつるぬ都しまけ　　もしへ

永兼四年内裏歌合に

大納言經信

月新のまみまとうかあまれ京雲吹ひ海よは乃嵐に

あいしらす　　左衛門督通光

立田山よはに嵐の松ふけは雲まはうとそみねの月新

崇徳院に百首歌奉けるに

左京大夫おきまけ

煤風にあるかひく雲の絶まよりも出る月の新れ　　さやけさ

影しらす　　道因法師

山のまに雲ぬきさる宵のまは出ても月そ移まる秋

殷富門院大輔

なるめつてしふまぬる袖のよは月

武子内親王

宵のまにさそも孫ぬへき月なるは山のまちれ物思ひ

ぬるまそなるむ思ひは遠れ思ひも遠秋のよ月

平兼秀連河　　持政大臣

雲はみなかりひきそなる妹風と松に絡て月をみるに

家に月を五十そらよりませ給けり時

月なかりをなくさめてこれ秋のよれんも志ぬ松の風に

定家卿

さむしろや絡よれ妹のせふけて月をしくに宮治の稽姫

郡しらす　左大将忠經

秋のよれなりかひそなりきれ絡に深ぬる在的の月

五十そ号なし　小野經月

行末はそもひとつの武蔵野に菓の原より出る月にけり

為後月　家周に

月を狩絡たん拂る急なれ晴行雲にも志の里人

郡しらす　左衛門督通光

秋のよれ宿る月も露なるに秋に吹こす萩のうへ

源家長

妹乃月志のに宿る新たけてを作る原に露深にけり

元久元年八月十五夜和方取まて田

家見ん月といふるを

前太政大臣

風まてる山田の庵をりる月やかなしに結ぶ水かんん

和歌所前合に田家月といふことを

前大僧正慈鎮

爲れくる佐久乃山田に養えて稲ぬるの庵に月をみる

皇太后宮大夫俊成女

いなゝ吹かせに雨かせてまむ庵ハ月そ雨とにはあらしかる

千しいしらす

おくれて稲ぬ穂のちりの積るまで月にたゝぬ庵の

大中臣定雅

秋の田のりねの床のいなゝ莚月やとれも志けるなるか

崇徳院御所百首歌めしけるに

左京大夫あきすけ

秋の田の庵さす猿の笘をあらみ月とりやもる

百首歌なるてさつりしとれ秋歌なり

武子内親王

妹乃色ハ籬にうとくなゆけとる秋なるて國乃月新

秋の歌中に

太上天皇

秋の露や袂にいてゝ結ふらんなるれ秋あらすやとる月か

子五百番歌合に

左衛門督通光

ひらに又蓄をたのめとゆにきり月ハつまなれ左衛門

經房の歌合に嘯乃月のんを

二条院さぬき

おかしさに（のり）嫌の様見れ家をくは又あり神に在前の月

あ千ぞ方ゝあてまつりし時

菅原雅經

たゝひかしはうは霧の志けりしめやとりり

月乃神のせきさに

新古今和歌集巻第五

秋方下

和命所にて花のことも方よみ侍し小夕

麻と云ふすを　菅原家隆朝臣

下ゐ葉かちる山の夕時面ぬまてや独麻の鳴らん

百ぞ方匡時　入道左大臣

山おろしに麻の音たゝ吹ゆ之花の八月にはよ也深ゐ

宰相法師

聖ふ世をの葉ふし志そゝみ山にふるさとも見志

見しらす　後恵法師

嵐吹き葛の原は鳴鹿ハうらみくのこと書を忘れ

前中納言通房

妻恋の鹿乃あちらとを見ぬ事ハさこ山かまそ山嵐を吹

百首寄事し時 妹命

見山への松乃梢を渡るなる嵐にやとる所をしの聲

晩関鹿といふことをよこと給ける

雅明親王

我ならぬ人も哀やまはるん鹿なく山の秋の夕暮

百首寄よみ給きるに

太御門内大臣

拾政大臣

あらへらる松の嵐やたゆむらんおのへに鳴るさをしの聲

千五百番寄合に

前大僧正慈貞

鳴鹿の聲に始めて思ひみそぬ夏の妹の忘ひと

家に寄合し給けるに鹿をよめる

檀中納言俊忠

よしをとらつま問鹿の鳴なへに小萩の原の露そこかなる

あいしらす

源道湖

ね覚して見くなぬ妹のよハ鳴やしぬらん鹿を鳴なる

西行法師

を山田の庵ちかく鳴鹿の音におどろかされておどろかすかな

白川院鳥羽におはしましけるに田家秋興
といふことを人々によみ侍りける

中宮大夫師忠

山里のいなばの風にね覚して夜ふかく鹿の声をきくかな

郁芳門院の前栽あはせによみ侍りける

藤原顕綱朝臣

独ねやいとゞさびしきさをしかのあさふす小野のくずのうら風

題しらず

俊恵法師

龍田山梢まばらになるまゝにふかくも鹿のそよぐなるかな

祐子内親王家にて歌合の後鹿の歌よみ
侍りけるに

権大納言長家

過てゆく秋のかたみにさをしかのをのが鳴音もおしくやあるらん

摂政太政大臣家百首歌合に

前大僧正慈円

わきてなど庵もる袖のしほるらんいなばにかぎる秋の風かは

題しらず

読人しらず

秋田もるかり庵つくり我をればころもでさむし露ぞ置ける

前中納言匡房

秋くれば朝気の風の手をさむみ山田のひたをまかせてぞきく

菩滋為政卿臣

鶯なく五月雨に穂し田を鶴の○雲みなそ葉ぬる

中納言家持

今よりは蝶風雲くなぬもいそかひとり長夜をねん

人丸

秋されは鶴の風に雲降て阿むさよなく阿母さへ

さ絞しみつま岡山乃罠へなるわさ田はしし雲はなくとも

貫之

うそそれ山田のいねは袖ひちて穂しさるへはみしはも

菅贈太政大臣

菓葉には玉とみて浮く絶人の袖は波乃秋の志く露

中納言家持

我宿乃たむら末に白露はなきし日よりそ秋風も吹

恵慶法師

蝶といへは葉をさてや結らんおさちら原はし鶴の白露

人丸

秋されはなく白露に我宿のおさちらうりて色付はり

天暦御哥

おもつかな聖にも山にも白露乃何とをうれしひを見

後冷泉院みこ乃家とやけり阿弱聖花

といふことを　堀川右大臣

露ゑ蓋ゑ整へと分つてうら衣ぬまてそ鳴る花の雲に

閑庭露　花といふことを　基俊

庭の面に花のよりさにしとよせくしのまにしをけ露か

白川院にて　野草露盤といふ心をこの

こそ流るまつりかに　贈左大臣長実

秋の草葉をしなべて露にぬまてや人の為見ん

百首の方を申し時　寂蓮法師

抽ふ袖より露やなるひかん秋風ふけは萬ぬ物ハ

秋方の中に　左上天皇

露ハ袖に抽ふ法ハ所そなきくかりす根ぬかひなれと

整原より露のゆりを易きて我衣手に秋風そふく

鄙しらす　西行法師

蓋取さむ小秋のなるまにはよりかり都ぬとさらゆく

守覚法親王五十首の中に　家隆卿臣

虫の音もなるれ秋あるぬ所でに抽ふひそふ松風そふく

百首の方中に　式子内親王

絶りなき庭のあさちにむもれ露の庭なる松虫の意

題しらす　　藤原輔尹朝臣

秋風ハ身にしむ斗吹にけりいまやうつらん妹かさ衣

前大僧正慈円

衣うつ音ハ枕にすかはらや伏見の夢をいく夜のこしつ

千五百番哥合に秋哥

権中納言公経

衣うつみ山の庵のしはしもしらぬ夢ちにむすふ手枕

和哥所哥合に月のもとに衣うつといふことを

摂政太政大臣

里ハあれて月やあらぬと恨てもたれあさちふに衣うつらん

宮内卿

まとろまてなかめよとてのすさひかなあさのさ衣月にうつ声

千五百番哥合に　定家朝臣

秋とたに忘んと思ふ月影をさもあやにくにうつ衣哉

擣衣をよみ侍ける

大納言経信

故郷に衣うつとハ行鴈や旅の空にも鳴てつくらん

中納言兼輔家屏風哥

貫之

鴈鳴て吹風寒みから衣君まちかてにうたぬ夜そなき

榜家のんを　　夜原雅經

見よれ山乃妹風さよ更て取て寝ろく寝ろなり

武子内親王

千度ろ磯の高に夢見て掬ふ袖の露そくたる

百首ろ寄しし時

姉きにかり山のたちく月寝てとをもれ里に寝ろ

九月十三夜月くまなく給けるとなり

めあしてよみ給きる

道信朝臣

秋もろ所よふけるれ月これは袖ものうらに露そ通る

百首ろ寄庫し時　　定家朝臣

独ぬる山鳥の花れ志るりおふ露をきぬるふ床の月新

榜殿太政大臣大将に給ける時月寄五十

首よませ給けるに

寂蓮法師

一めみ聖人のきしさいらに拓て露乃ふすらにやらる月新

月寄とてよみ給ける

大納言經信

雄のよい衣所むしろ重ても月乃光に志く掬そなき

九月つこりまうこふ

花山院御製

秋の夜ははや長月になりにけりことはりなりや寝覚せらるゝ

五十首哥中　寂蓮法師

村雨の露もまたひぬ槙の葉に霧立のほる秋の夕暮

御製とて　今上天皇

ゆふひさすみ山の杉のむら霧にしくるゝ桂の下葉

河霧といふことを　大納言通光

曙や川瀬の波の高瀬舟くたすか人の袖の秋霧

堀河院御時百首哥奉りけるに霧をよめる　權大納言公実

麓をはうちの川霧立こめて雲ゐにみゆる朝日山哉

題しらす　曽祢好忠

山里に霧の籬のへたてすはをちかた人の袖もみてまし

清原ふかやぬ

なく鹿の音をみにそへてきくなへに山霧立つゝ時はまけ

人丸

たかまとの萩のしたそよき林風の吹なへに鹿そ鳴なる

秋風に山飛こゆる雁かねのいや遠さかり雲かくれつゝ

凡河内みつね

初雁の羽風すゝしくなるなへに誰か旅ねの衣かへさぬ

鶴の〇ハ風にさきをひてゐるれともわつまの人のとつてゐる

横雲のせにまつ海に志のゝめに山とひこゆる初鶴の翅

白雲を翅にかけて行鶴乃門田のおりに反志てゐるゝ

五十首奉し時月前雪鶴といふことを

前大僧正慈円

大江山にふく月の氣さえて鳥羽田の面にわつる鶴金

白いしらす

羽恵法師

村雲や鶴の風に晴ぬらんと思きて宅にはめる月を

續人志らす

西行法師

皇太后宮大夫後成女

吹まよふ雲ゐを海の初鶴の翅にあらすよりの秋せ

詩に合せし方中に山路秋行といふ事

と

家隆朝臣

燦風の袖に吹まくみ〇乃雲を翅にかきて鶴も鳴也

五十首奉し時菊籬月といふ心を

宮内卿

霜をまつ籬のさくの宵乃まに雲にかきて海にかゝる山の覺乃月

鳥羽院御時内裏よりきくをめしけるに

奉りとて結び付給ふ

九重にしつゝひぬ夫菊むなれまうれをしひしるゝ
　　花しらす　　檀中納言定頼
今よりハ又咲むもなれ物をいてゝなきそ菊の変
　　拈行聖への葉を　　中務卿具平親王
秋風に忘れるゝの人のむよりも出のねいてゝ拈に書かれ
　　そのしらす　　大江加言
ね見てゝ袖にへさむく秋のよれ嵐吹之まに出れ忘
　　千五百番方合に　　前大僧正慈鎮
煤をへて衰も露も深草れ里にふ物はつゝなり

　　花の上に大臣室
入日さし棒のおむらなひきたり秋風にうつゝ吹ん
　　多いしらす　　皇太后宮大夫後成女
おくふちゝ露乃枕に外絶てうつゝ吹也廊の山風
　　千五百番方合に
同人を嵐吹そふ秋ハきて木葉にうつむ宿れ見せ
色かわり露をハ袖にをきあまりひうゝ拈て行聖の荒
　　秋方とて　　太上天皇
秋深ぬなけや霜にれ葉やゝ新さむしよもきふの月
　　百番方庫　　桜政太臣

蓋明や霜のさむしなほ衣かしきひとりかもねん

千五百番歌合に　　美文権大史公継

祝えすら長月のよれ床をきこと鶴吹風に霜やなるらん

和歌所にて六首歌ほうしまつりし時秋

の歌　　前大僧正慈円

雁ふるき渓河乃鳴れ在明にかたふく月をくる海を

蓋秋のんを

長月をいく在明に成ぬらんあさちう月のいとさひり

拵政大臣大将に給ひて時百首歌

よませ給けり　　宰相法師

鶴乃雲れかけ橋秋蓋てよかれは霜や立まさるらん

さくらのりみちしはしめしるをこそ

中務卿具平親王

いけのまふ紅葉志ぬらん山様時ろう前のちをおしみ

紅葉透雪といふことを

高倉院御歌

うす雪れ立まふ山のりみちてさやうなるねとそれ終り

秋歌とてよめる　　八条院高倉

秋なひの三室れ梢いるなんなへて乃山を時雨まるに

寂勝四天王院の障子に珍麻川出たる

とし　　太上天皇

鈴鹿川ふかき木葉に日数へて山田の原の時雨をそきく

入道前関白太政大臣家に百首歌よませ侍りけるに紅葉を　皇太后宮大夫俊成

心とや紅葉はすらん立田山松は時雨にぬれぬものかは

大井川にまかりて紅葉見侍りける　藤原輔尹朝臣

思ふことなくてや見まし紅葉葉を嵐の山の麓ならすは

題しらす　曾祢好忠

入日さすさほの山への柞原くもらぬ雨と木葉ふりつゝ

百首歌奉りし時　家隆

立田山嵐や峯によわるらん渡らぬ水も錦絶けり

左大将に侍りける時家に百首歌合し侍りけるに柞をよみ侍りける　摂政太政大臣

柞原志つくも色やかはるらん森の下草秋ふけにけり

定家朝臣

時わかぬ波さへ色にいつみ川柞の森に嵐ふくらし

障子絵にあれたる宿に紅葉ちりたる所をよめる　俊頼朝臣

なでは發和葉にいろりまして彩乃悪ふに秋風そふく

百首奇事しし　妹の奇

武子内親王

桐の葉をふミ分かゝて嫁にかりかゝる人を待とかけまと

鄭しらす　曾孫好忠

人にこす風に木葉の發そくよかく出の聲よりも

守覚法親王五十首よみ給けるに

和葉の色に雨かせてとれは木をかせにしろふ秋の山か

子五百番奇合に　家澄朝臣

露しきれり山陰の下和葉ぬるとをおもん秋の形見に

角ひしらす　西行法師

松にはふまつのそうつ發にきりとふ山の姫は風をきもん

法性寺入道前實白太政大臣家奇合に

前參議親澄

鶉なくなる聲にあてうれ和葉ちりぬ斗に秋風そふく

百首奇事内　二条院さぬ式

發かゝ和葉乃色にふかれとまてれは山川の名

鄭しらす　人丸

おすか川和葉なかるかつらさ山の秋風吹そ志ぬ

長月のつごもりがたに
山の紅葉ばを
人のもとに
つかはしける

家ごとに
紅葉をぬさと
たむけやる
秋のわかれは
いそがしの
ころ

高野へまかりける時
もみぢ葉を
ぬさとたむくる
山ごえは
神のまにまに
こそ
ゆき
かへりけれ

題しらず

ちりぬとて
かへりみもせぬ
人のため
なほ
ぬさとのみ
手向けやはする

百首歌たてまつりける時

秋風に
あへず
ちりぬる
もみぢ葉の
ゆくへ
しらずも
なりにけるかな

百首歌たてまつりける時

風ふけば
こなたかなたに
ちる
もみぢ葉の
行くへも
しらぬ
秋にもあるかな

百首歌たてまつりける時

秋ふかき
ときはの山の
もみぢ葉は
ふもとの
ほかも
嵐のみ
ふく

家に百首歌合し侍りける時

秋ふかき
山もとごとに
ちる
もみぢ葉を
ぬさとや
神の
たむけ
そめけん

題しらず

秋の
もみぢを
ぬさと
たむけて
いそぐ
人の
心は
いかに
ぞや
ぬさとも
いかが
とぞ
思ふ

題しらず

秋ふかき
ときはの山の
もみぢ葉は
ふもとの
ほかも
嵐のみ
ふく

題しらず

もみぢして
かへりみもせぬ
人のため
なほ
ぬさとのみ
手向けやはする

百首歌たてまつりける時

風ふけば
こなたかなたに
ちる
もみぢ葉の
行くへも
しらぬ
秋にもあるかな

百首歌たてまつりける時

秋ふかき
ときはの山の
もみぢ葉は
ふもとの
ほかも
嵐のみ
ふく

家に百首歌合し侍りける時

秋ふかき
山もとごとに
ちる
もみぢ葉を
ぬさとや
神の
たむけ
そめけん

題しらず

秋の
もみぢを
ぬさと
たむけて
いそぐ
人の
心は
いかに
ぞや
ぬさとも
いかが
とぞ
思ふ

題しらず

秋ふかき
ときはの山の
もみぢ葉は
ふもとの
ほかも
嵐のみ
ふく

題しらず

もみぢして
かへりみもせぬ
人のため
なほ
ぬさとのみ
手向けやはする

百首歌たてまつりける時

風ふけば
こなたかなたに
ちる
もみぢ葉の
行くへも
しらぬ
秋にもあるかな

百首歌たてまつりける時

秋ふかき
ときはの山の
もみぢ葉は
ふもとの
ほかも
嵐のみ
ふく

家に百首歌合し侍りける時

秋ふかき
山もとごとに
ちる
もみぢ葉を
ぬさとや
神の
たむけ
そめけん

題しらず

秋の
もみぢを
ぬさと
たむけて
いそぐ
人の
心は
いかに
ぞや
ぬさとも
いかが
とぞ
思ふ

守覚法親王

身にかへていさゝは秋をおしませんにしてもとゞまさ露の命を

同九月(無ヶ)乃こゝろを

前太政大臣

なへて世のおしさにそへておしむ秋より

後の雄のかきりを

新古今和歌集巻第六

冬命

子五百番に方合に初冬乃心をよめる

皇太后宮大夫俊成

なきあかす妹乃別の袖の露霜とそむすへ冬やきぬ見

天暦御時神云月といふことをかみまをさ

て方法ゝまつりけるに

菅原高光

神云月なせに和歌の葉とれはそこそうとあるに物そ悲さ

鄙しらす

源重之

名和川やるせ乃波そ乃なる和葉やいとゝよりて世ん
後冷泉院御時うへの花乃ことを大和川に
まゐりて和葉浮かといふ心をよみ給ける
藤原資宗朝臣

筑士に雨てことゝいん水上ハいつ汁ふく山のおしそ
大納言經信

夜ゝ雨和葉なかるゝ大和川いつ重ねせきあの志らゝ
大井川に雨ふりて落葉満かといふ心を
よみ給ける
藤原家經朝臣

高瀬舟志ゝ汁に和葉の流てくる大和川か
深山落葉といふ心を
後粉朝臣

日くれハおふ人なし正木ちるみ村の嵐乃音ハかりして
覧しらす
清浦朝臣

をのつゝ音するハ庭乃面に木葉吹まく岩ぬ色
春日社会合に落葉といふことをよみて
前大僧正慈円

木葉ちる宿にしくし袖の色をありとも志らて紅嵐か
右衛門督通具

木葉地ゝ時雨やまゝふ我宿にりつさ海の色とみるまで

荷原雅經

うり行雲に嵐の心也ちらう正木ぬらしきの山

七条院大納言

初時雨思ふの山の紅葉を嵐ふけとなぞめすやあらん

伝流

時雨ぬ袖をあへて是川の山の木葉に嵐ふく比

荷原秀能

山里の風にさきしきさゝ言に木葉乱て物そかなしき

祝部成茂

冬のきて山もあらはに木葉ふり(ちり)ぬる松さへ心にさひしき

五十首寄事し時

家内

唐錦秋のこゝや立田山葉あへぬ枝に嵐ふくなり

粉浦で家寄合に落葉乃心を

荷原資隆卿

時雨ときけは木葉のゆる物とそれにもぬるゝわ袖

彫しらす

清眼蔓簑

時しもあまた冬は葉りつもの神無月まはりに(ちりぬり)物也(なり)葉ぬれ

津守國基

いつ乃まに宅のきしきぬらんもけしきこと物の木枯の世

西行法師

月をまつ高ねの雲ハ晴よきりしあるへき初時雨かな

お大僧正兄忠

神云月木の木葉ハ黄ハそ松にそ風の音ハ雲ゆゑ

清輔朝臣

紫の戸に入日の影ハ行しかたいかに志るへ山へ如ん

山家時雨といふ心を

夜原澄信朝臣

雲晴て後も志るへ紫の戸を山風にぬ松の下露

寛平御時后宮の命合り

讀人しらす

神云月時雨降し山の正木のつゝ色まさりけり

多いしらす

中務の具平親王

木枯の音に時雨をきゝわて紅葉にぬる袂とそみる

中納言兼輔

時雨ふる音はされ共笑行のなとしらしかに色もかはぬ

十月斗常盤棗を過とそ

能因法師

時雨の雨深くてきり山城の山の棗の枯の下葉ハ

彰しらす

清原元輔

冬とおもひ雨こそ時雨と思ひ過ぎ雨さへ寒きかな老の涙を

鳥羽殿にて猿宿時雨といふことを

後白川院御所

雨ひとなる山木の居に猿ねて時雨にぬるゝ所に寝ぬ

時雨を

前大僧正慈円

やよ時雨掛ふ神のなりせハ木葉のちに何をそめまし

冬所中に

左上天皇

ぬるゝとりおもそひかへて いかなんまなく時雨ぬるの神枝

鄙しらす

人丸

時雨ぬおめまなくしふまハ桔のハもなくそひかへて色何にかり

和泉式部

世中に稀もふるかな時雨ぬ雲まの月のいりやと思ハ

百首所なしに

二条院さぬ氏

打そおまなるめふかゝ海濱雲の神をひとふにうち時雨て

鄙しらす

西行法師

秋ふのやと山の里や時雨らんい駒乃たけに雲ぬれる

道命法師

晴くりなき時雨ハさゝめなきを掛をふりそぬるハ我と思ふ

千五百番所合に冬の所

源具親

今ハ又ちてもゆふ時雨ハひとりふるまり庭の松也

雨いしらす　後恵法師

みよしの山かき曇雪降ハ葉の里ハさらしてれつ

百首寄年し時　入道左大臣

桂の風に時雨ハ音乃ゆるかれ和葉やふくて夜つりるん

千五百番寄合に冬寄

二条院御ぬき

世にふるはさ物を桂のやに風にくもるゝ初時雨ハ

影しらす　源信明朝臣

かのくと在明の月の月新に和葉吹なる山おろの風

中務卿具平親王

和葉をなふれしきん木ゆりりまくる月ハと聞ふれ

宜秋門院丹後

吹もしる梅嵐の後ハ高ねより木葉くりして月や出ん

春日社寄合に曉月といふんを

右衛門督通具

霜ふる袖にも新ハ残りきり露ふるまゝ在明の月

和寄取て六首奉し小冬寄

藤原家隆朝臣

詠ていくあひ袖にくりうらん時雨にふくれ在明の月

題しらす　源基光

定めなくしてくるゝ元の村雲（うきくり）にいく度あるゝ月を待（みつ）らん

子五百番歌合に　源具親

今よりは木葉ゝくれしあはれ時雨に沙る村雲の月

題しらす

晴くりる氣を都にしきこそ志くるとつゝる山ぬの月

五十首なし時　寂蓮法師

見えくに里わく月の光も時雨をくるよ乃村雲

雨後冬月といへるんを

良暹法師

今はとてねなほ遠ぬを時雨はつゝ元ともみてはしめる月も

題しらす　曾祢好忠

霧霜のよはにおきかそ冬のよの月みる程に袖にとりぬ

前大僧正慈円

紅葉ゝはなのゝ深さゝ色そゝ遠よそけにをけるゝ霧

西行法師

小倉山楽の里に木葉ちるは梢にいるゝ月をみるも

五十首なし時　雅經

秋の色をもらひそゝやゝ久かるゝ月のかつらに木枯乃せ

題しらす　式子内親王

風雲之本業晴行なるに於ては此度の月新

殷富の陸大浦

わが門の苅田の園に外鴨の床あらはなる冬の月

清慎朝臣

冬枯の柔の枯葉の霜の上におちたる月の新のさやけさ

子晋嵩寺合に

皇太后宮大夫後成女

にえりもひくさもむ（ぬ）枯に新されば霜ふるさよ此前の月

右清の繪通具

霜結ぶ袖のうしさうちとけて稀ぬよの月の新の伝むをさ

五十首寺をしし時

雅經

新しめし霧のやとりを思ひて霜に詔とふ淺芽生の月

橋上霜といふるをよみ給けり

法印奉清

うき霧の袖をや霜にかさねん月によかはうちの橋

多いしらす

源重之

夜苅の萩のふるえは枯にかりむ遠ゆ鳥は宮にやはらん

道信朝臣

にしに深く都さへ雲とさわ多のいしへの霜になれまよふ（さうり）

冬の寺中に

冬上天皇

菊花を折て送れ初霜乃をれなりしそ色まさりけれ

同御時大井川に行幸し給ひけるに

坂上是則

新さへにいまはと菊乃ふるふ波の底にも霜やをくらん

きりしら次

和泉式部

聖へきれハ花もうかれ心ひ菓枯行冬になりそ志にけり

西行法師

津の国の難波乃芸ハ夏なれやあしの枯葉に風渡るも

崇徳院に十首奇を奉けるに

大納言成通

冬ふく如にきしに難波えの春葉はらぬあれ村立

冠しらす

西行法師

乃見さいまへうへのみをおもふ唐なしへん冬の山里

あつまに給けるとれ都乃人につゝり

けり

康資王母

東海乃君の冬菓茂合て給ふにみてぬ志ほ乃ち

冬の奇とそよみ給ひ

守覚法親王

昔忘ふさ東の花の床をて海をこゆる神の上ち

百首奇を奉し時

立ぬる山の雪を善終て桂乃下葉もあらひ清ぬ
むしらす　皇太后宮大夫俊成
みこりかへいそこゝる山川の岩まに結ふ鳴のこゝ
　桂政太政大臣
消えり岩まにまよふ水のあわの遠宿かうすれ
枕まを袖にも波つらかそむきぬ夏をとふ嵐
　五十首なし　附
水上やあえくこゝる岩まより清澄川に結ふ白浪
　百首なし　附
うこ数乃袖のおもむきかれ着て袖ぬよ着てみ
　家勝四天王院の陳子にうち川出たる
　而　太上天皇
橋姫のうしき衣さむしろに結ひむすきうちの暁
　前大僧正慈円
あしろ木にいさよふ波の善絵て独やねぬうちの橋姫
　百首寄中に　武子内親王
見るまゝに冬はさふかりかもれぬる入江の汀うすれて
　桂政太政大臣家寄合に湖上冬月
　藤原家隆朝臣
志ろ乃浦や堂さうり行波まより出て出る在明の月

守覚法親王五十首ニ六ノ事せ給けるに

皇太后宮大夫俊成

独みる池のおもはむ月乃(ハイ)やそ秋まもうつりぬるか

題しらす　山高赤人

むかしの玉のよれふ垂ゆけハ楸おふる清きうらにふ鳥鳴之

万葉の河原に千鳥なきけるとよめる

伊勢大輔

約されハ万よふけぬ里と千鳥鳴万葉の浦ハ通うる程り

みちれくにて海うりけるとれよみ給ひ

能因法師

夕されハ志ほ風こゝそみちのくれ聖田乃玉川千鳥鳴也

題しらす　室しし

白波(雲ヶ)にまもふこちらに演千鳥ゆきさ物ハよるれ一聲

後徳大寺左大臣

夕鳥きにと演る千鳥波まよりみゆるこ海乃雲に消ぬる

堀川院に百首を奉けるに

祐子内親王家紀伊

浦風に吹上の演れ海千鳥波あらはしよるに鳴也

五十首を奉し時　桜政左政大臣

月そまむ誰ふくこに紀国や吹上乃千鳥ひとり鳴之

千五百番哥合に　正三位季能

ほよ千鳥聲こそちくなるみしかこふて月に志ぬや志ぬ

寂勝四天王院障子になるこの浦の夫

しらぬ所　菅原秀能

風ふけはよそになるこしひ志ぬ波になく千鳥哉

おなし所　権大納言通光

海人の日を夕舞になるみしこ物ゝ神より千鳥鳴也

文治六年女御入内屏風より

正三位季經

風寒ろいし海の破の村千鳥立ぬは波のんなりと書り

五十ぞ年し時　菅原雅經

もろ海やさそをいく和の行水に数かさまふ鷲の独ね

城川院に百ぞ年けり時

河内

千鳥乃ゆきはのうれなりし波乃枕にいくよへぬ

影しらす　湯原王

吉野なるなつ川の河よりに鴨そ鳴なる山陰にて

能因法師

園の上にふるこえ所しおもひそとをなる菓ひろ柏に霞ふる

法性寺入道前宮白太政大臣

ゆはやしられぬ残る世をへてもいかによ霞ふるやと

人丸

庭の雪におさちたちはゆちら山みすのおくは雪家そ(ふる)

雪朝基俊か許へつかはしける

瞻西上人

常よりもしのやの軒そうつもるゝけふは都に初雪やふる

返し

藤原基俊

降雪にまことにしのやいかならんけふは都にあとたにもなし

冬奇 あはれとよみ侍けるに

権中納言長方

初雪のふるの神杉うつもれてしめゆふ野へは冬こもりせり

なりにけるを待ちし程にさしかは雪の降りける日

紫式部

降れはかくうさのみまさる世をしらてあれたる庭につもる初雪

百首哥よみ

式子内親王

さむしろのよはの衣手さえさえて初雪しろし岡の辺の松

入道前関白右大臣に侍りける時家哥合に

雪をよめる

寂蓮法師

降そむるけさたに人のまたれつるみ山の里の雪の夕暮

雪のあした後徳大寺左大臣の許よ[illegible]

かりしけり

皇太后宮大夫後成

きふはりし君りや同とあるむまたはまるこ給りあれ庭の雲

返し

後徳大寺左大臣

今そこさくんは給をなるまきり雪かれなりてしひやれも

尋しらす

前大納言公任

三ゝ山にもふる雪や積るんよりふにしく袂さゆ也

深夜閑雪といふるを

刑アマ花蕪

明やらぬ村荒れ家に雪ゆ也雨かれの竹れ雪乃下をれ

うへ乃れのことを嘯望山雪といふるんを

はらしまつりけるに

高倉院御前

音羽山はやかふ三寸ゝ白雪を明ぬと告る鳥れ急ぬ

和菓乃ちりありけるうへに初雪乃降

かゝるまて給ひるをみくく上東門院白川

院に給けり女房につかしけり

藤原家經朝臣

山里は居りやみて次ぬれん和菓とうりに雪れ降ぬ

野亭雪をよみ給けり

藤原國房

雪降ハみねの志榊うつりまして月ハみつきつゝあまれたる山

見しらす　小鈴法

かれ行りまゝ雪まさる雪ハ花ゝとつりぬされは同人かも

前大僧正慈円

庭ハ雪に我ハつきて出つるとこ里ハかりと人やみるらん

なりむまゝハわり山のとに雪白都の人よ衰ともみよ

曾祢好忠

冬草乃拓は人のいまゝ更に雪ふゝ分て見えんあらハ

雪ハあしゝ為大原まてよみ給けり

寂然法師

易きて居らまふ人をもあしいくへをつりまゝ庭ハ白雪

百首奇中　太上天皇

はしハ花も紅葉も枝はなしかし消そ杉の白雪

千五百番奇合より

左清門督通具

草も木も降まるへたる雪をよに春給梅ハ花のそすゝ

百首奇めしけり時

崇徳院御奇

御粉をうへたるの小降叢あらハ雨まゝ鶯をとそ

内大臣に給けり時慈奇合より

法性寺入道前関白太政大臣

水鶏すゝとゝあらぬ家をなさりてくれのへまをふもしらつ

京極関白前太政大臣高陽院方合り

前中納言匡房

水狩壁ハかつ隆雪にいふ事をてこゝちもみしほ第かれて

鷲鶏乃心をよみ侍けり

左近中将公衡

かゝる舊をこれて其は来おり数てよとれ川せの月をみかゝ

うつゝ火をよみ侍けり

権僧正永縁

なかくに消ハきえんなて埋火乃いきそかひなれ世にもなかれ

百首奇なりけるに

武子内親王

日数ふる雪けにまたりすゝう海の煙もさひし大原乃里

歳舊に人りつゝりしけり

西行法師

なのつゝいはぬをしてふ人やなりとやまとらふ程よりも舊あり

栄舊によみ侍きり

上西門院兵衛

四てハ身にそふ物と知なりし舊り年を何してふれん

皇太后宮大夫後成

てそ行世は面影れたし雪と降ぬるゝ事乃嘗かれ

大納言隆季

あたしさきや我身ふとあくらん乞まゝ行駒に是を見て

後成て家に十首ゟよみ侍けるに嚴

嘗のんを　後恵法師

歎きけしも嘗ぬ霧の命いきる斗を思おまして

百首ゟ所生し時　小侍従

ふひやまゝ屋そちれ事の嘗なれいつりかへ掛ハなしき

鄙しらす　西行法師

昔ふ庭ふうれ木をつゝなきて世まもふぬ事嘗か

桜政大臣

石上ふるれを所に霜をへく一夜斗に残る年かれ

前大僧正慈鎮

年はおきてうれ世の夢はさむへくハくろ大きふいと作ほし

権律師隆聖

鶴とのあつぬれ水に年嘗てわる世は祖のくまれぬるが

百首ゟ所生し時　入道左大臣

いそかれぬ事乃嘗ゝ衣なまし昔ハよそにさしし表は

嚴嘗に身は老ぬるとをなけきそよみ侍

けり

和泉式部

うそふ重ハ手の紙りもなりしきり老ぬる計逢きハなし

入道前実白百そくよませ給ひ時歳蓄

と

後徳大寺左大臣

石川淵ふるを此川の名ゝ枕とやくもの蓄にきるゝ

太御門内大臣家にて海邊歳蓄といへ

んをよみ給けり

菅原有家朝臣

行手をしまれおまのぬ重衣重て袖に波やかくらん

寂蓮法師

老の波こえけり身にそ衣なれとも今ハ重忌の松山

子五百番前合に

皇太后宮大夫俊成

きふことにかふやうきりとおしめ共又をことしに

あひにけるか

新古今和歌集巻第七

賀部

御調物ゆるされて圓とめ所をゆらん

仁徳天皇御部

して

たかきやにのぼりてみれハ煙たつ民のかまとにぎはひ

ぬしらす

讀人不知

初春のはつ子の玉ゝとかゝらしゆらく玉のと

子日とよめる

菅原清正

祢のひてしめつる野への姫小松ひそやかに千代の陰を雨運

題不知

貫之

天つ代のもしかすとハ白雲の濱の真砂と誰かしきしきん

亭子院の六十賀御屏風にわかふ法

めつとしろとよみ侍けり

萬ふ生ふる野へといふのへと天つ為万代しめてつまんと思

延喜御時屏風にり

久ゆ山ゆ子とせとかけて足曳の山おひの色かゝる

祐子内親王家にて様を

太御門右大臣

天つ代にあふへき春のおかけれハ菊とも様おくまてそえ

七条の宮の五十賀屏風にり

伊勢

住の江の浜の真砂をふむ鶴は久しき跡をとむるなりけり

延喜御時屏風に　貫之

年ごとに生ひそふ竹の世々をへてかはらぬ色を誰とかは見ん

題しらす　みつね

千とせふるおのへの松は秋風の聲こそかはれ色はかはらず

藤原興風

山川の菊の下水いかなれば流れて人の老をせくらん

延喜御時屏風に　貫之

影つねとなる月のさやけさもいつまでの始まりてみざらん

文治六年女御入内屏風に

皇太后宮大夫俊成

仙人の折る袖にほふ菊の露うちはらふにも千世はへぬべし

貞信公家屏風に　清原元輔

神無月紅葉も（ちり）しらぬときは木に（本より）万代かゝれ峰の白雲

題しらす　伊勢

嵐ふく色もとみねど白波のよする岩ねは色まさりけり

後一条院むまれさせ給へりける九月に月くまなかりける夜大二条関白中将に

侍けるに若き人々さそひ出して池の舟の

をそ中鴻乃松かせにしまいす程たかしく
みえ侍けもとも　紫式部

くりはなく子年にはあつの面にやとれる月の新もの遠
永兼四年内裏の合に池水といふことを
伊勢大輔

池の代にふくしきみぬまは底の玉りく光みたり
堀川院大嘗会所撰日来面降てその
日になりて空晴て侍々れは紀伊典侍に
中けり　六條右大臣

君の代の子とせの数をくれなはくりしぬ空の光まそみつ
天喜四年皇后宮の合に祝のんをよみ
侍けり　前大納言隆國

住の江に生そふ松の枝毎に君の子とせの数そこもれる
寛治八年開白前太政大臣高陽院の
合に祝のんを　康資王母

第代を松の尾山のかけ茂に君をそ祈るとれはなきに
後冷泉院おさなくおりしまけり時卯杖
の松をくの子に給はせけるよみ侍
けり　大貳三位

おひおひのをしきの山の小松原今より子代の陰を傳へなん

永保四年内裏子日に

大納言經伝

子日すゝ御かれのうち小松原子代とハ御かの物とやみる

檀中納言通俊

子日ニ御整へ乃小松とも也 抽て手のとなく若そひ

永暦二年内裏ニ合に祝乃心をよみ

侍けり

お中納言匡房

若ゝ代ハ久しかるへきこまつらひや五十珍の河なるを終せて

見しらす

よみ人しらす

これハなゝ松にかれる葉なれハ手乃となるさしるへ照

二条院御時花有喜色といふことを人々

御うまつりける

刑部卿範兼

若ゝ代にあへるハ誰をうゑきをむハ色にも出にけるか

同御時南殿乃花のさかりに所よめと

おかせられけるハ

三河内侍

身にかへて花もおしまし若ゝ代にみるへき春の限なれハ

百ゝ所なし時

武子内親王

天乃下めくむ草木のめをさかりに限りしらぬ御代の末く

京極殿にてさしめて人々所御かうま

つりしに小松有喜色といふことをよみ

侍し　摂政太政大臣

かすみて木のめも春の浅緑松こそ世の色はかはらね

百首歌奉し時

敷嶋ややまと嶋ねも神代より君か為とやかためおきけん

千五百番歌合に

ぬれてほす玉くしの葉の露霜にあまてる光いく代へぬらん

祝の心を讀侍ける　皇太后宮大夫俊成

君か代は千代ともさゝし天の戸や出る月日の限なけれは

千五百番歌合に　藤原定家朝臣

わか道をまもらは君をまもるらんよはひはゆつれ住吉の松

八月十五夜和歌所の歌合に月多秋友

といふことをよみ侍ける

寂蓮法師

高砂の松も昔になりぬへし猶行末は秋の夜の月

和歌所開闔になりてはしめてまいりし日奏し侍し　源家長

もしほ草かくともつきし君か代の数によみおくわかの浦波

建久七年入道前関白太政大臣宇治にて人〻に歌よませ侍けるに

前大納言隆房

うまさやかしく袖にはしたむかん考ふ給えてうちの橋
前應元年入道前實白太政大臣宇治にて
河内久澄といふことを人々にしまゐ給
けるに　清浦朝臣
年ごろうちの橋りまことにいく代にぬぬ水の水上
日吉祢宜成仲七十賀し給けるに
はらいしける
七十に三代演松老ぬまことに子代のこりは稚そいるけき
百年ゝ所よみ給けるに
後徳大寺左大臣

八百日ゆく濱の真砂を君が代の数にとらるんおきの嶋
家に所合し給けるに春の祝のこゝを
よみ給ける　榜政大臣
春日山都の面ゝそふ小の夜浪春にあへとは
天暦御時大嘗会主基御中國中
山　讀人不知
とれはなるさひの中山をしまへて子とせを松のふるき道
長和五年大嘗会悠紀方風俗所近江
物日卿　祭主輔親
あらしさは物日の日の日かけ草とよれ明のかさし如く

永兼元年大嘗會悠紀方屏風近江國
りの山とよめる　武門大輔資業
まつらきとゝれいなきいふ山の山人なしやまかつらせり
寛治二年大嘗會屏風に近江國あるれ
お山とよめる　前中納言匡房
とやかつあるれお山の玉つゝれ霜をうふとも色はかはらし
久壽二年大嘗會悠紀方屏風に近
江國かしゝ見の山とよめる
安内宮永範
くりはなきさしみの山の月をそおきてきれなきを宇に知
かし

平治元年大嘗會主基辰日參入
音聲生聖とよめる
刑部宮範兼
大江山こそいくのゝ末をそゝ見ある世にもあひにけるか
仁安元年大嘗會悠紀方なまきるに稲
春奇　皇太后宮大夫後成
あきのやさくこれいねとりつゝそ見ける此代の初にて
元暦元年大嘗會主基方青羽
山　武門大輔光範
立よれは涼しなきりあるれ青羽の山の松の下風

同大嘗會主基方稲春方丹波国長
田村を　　権中納言兼光
神代よりきふのゐとやゝけるかふ白れいひ乃志るひ[illegible]
建久九年大嘗會主基屏風に六月
松井　　権中納言資実
これはなる雲井の名を結ふものしてことにしう
[illegible]代はみしけり

新古今和歌集巻第八
哀傷哥
[illegible]しらす　　僧正遍昭
末の露もしの下や世中のをくれ先ゐ多つためしなるゝ
をのゝこゝ[illegible]ち
哀なり我身のそやつき緑つゐまは聖への家と云ハ
酡醐のみかとくれ給ひのち孫生の時に
三条右大臣につかしけり
中納言兼輔
様ちつ喜の末にハ娘にかりあまくも志らぬなりあせまに

正暦二年孫園の妻様乃枝に付て左衛門
臣よつかしきう　実方朝臣
曇深の衣うき世の花盛なり忘てもありてきかな
返し　道信朝臣
あつさゆ花をや妻も忘つらんあり昔をしひ出つ
やよひ乃比人にをくまて歎けう人のもとへ
けうりしきう　成務法師
花様まさ盛まて夜にきんなけき乃本をしひとも
人のさくしをうへをきてそのさしの四月に
なくなりにけう又乃としりしめて花咲

ゆうを見ふく　大江都言
花うんとうへ今人も家宿の様いとそ妻そ行うまし
年末往給けう女の身まうりにきう早
九日ともてく狩山里にこりつまおてよみ給
けう　左京大夫おきこまけ
誰も皆花の都に夜ひとりしうる妹の山里
云守朝臣母身まうりて後の妻法金剛院
の様をこそ　後徳大寺左大臣
花そいいとく家ちそいそうまぬ給ふんとしも花なきれハ
定家朝臣母のおりひに給きう妻の書に

つゝりしけり　　桜政大臣

春霧の中に遠雲の余波さへ今ふを限のまれ如かり

前大納言光粉春月雨かりにけりを樹

なる所にて口ゝくして雨待ちつゝり

前左兵衛督惟方

立のわゝ燈をあふもみるへきに霧にまゝふ春の明の

六条桜政くれ待て後うへをきて待ちつゝ

牡丹の咲て待ちつゝをおりて女房の許より

つゝりして待けれハ　　大宰大貳重家

形見とてみまいなけきなかゝ菓なに中しなひ発

なきあひ子のうせにけるうへをきあり

きつ何やめを見えくよみ待けり

高陽院本綿宮平

おやめ菓なれ思へとて樹をきてよりれ花の家と消

なきくるゝ待けり此五月五日人のりとへ

中つゝりしきつ　　上西門院兵衛

きふくれと何やめも忘らぬ袂に昔をこふるねのこゝろ

近衛院くれ行にけれハ世をそむきて後

五月五日皇嘉門院にまゐられけり

九条院

あやめ草ゆきあらんとする袂ハ昔を忘るねそうなる

返し　　皇嘉門院

ちとこそハおなし袂の色なるめかるゝぬはとも色そけるかな

しみ侍けり女なくなりまゝ此夜原為粉

鈴につま月海りにけるにつゝりしきる

よそなれとおなしこそかゝふへき誰も忘ひの色となるは

返し　　夜原為粉鈴

桂まもあらぬ忘ひハなれ人も接の色まやはしるらん

小武戸内侍霧をきさらの萩をりあつゝ

衣をとさて侍けるを月海りて後上東

門院より弱ひきるに事とて

和泉式部

なくとみ霧もあきりるなくて消は人を何にあらん

返し　　上東門院

忘ひきやうなく逆袖の上の霧をうしにきん物とハ

白川院此時中宮おはしまさて後ちは

方ハ草のミ茂て侍けるに七月七日まゝ

まへの霧とり侍きるとて

周防内侍

浅茅原ちらなく匿菓の上の露を形見とおもひきやや
一和交資子内親王におひてむしの
なりともやいくしてよみ侍けり
女御嚴子女王
袖に同へ秋の夕ハ志られけり消しおきちる露をかけ
例なくぬるをとりくなりて出くしたるし
給けり日上東門院中宮とゆきる時つゝハ
しきり
一条院御哥
秋風の露のやとりに君をとゝきそちりを出ぬるとそ子さ
雄の法おさおひ子にをくれぬる人なり

大武三位
別々ん名殘の袖をかはぬまをきやそふれん秋の夕露
返し
よりん人しらす
をきそふる露とりに消りせく波にのこもうれ出むか
廣義公乃母なくなりてのち女郎花を
みくく
清慎公
女郎をみるにんハなくさ雨くいとく昔の秋そ忘しき
弾正平為尊親王にをくもそなきれ
侍けり法
和泉式部
秋見すり身を吹とをれ風の音を昔ハ袖のよそにきくん

従一位源卿子うれ給て宇治より新少将
の許まゐり給ふ　知足院入道前宮日本政治
袖ぬらす萩乃うへの露ハ昔忘ぬ出の音そすゝ
法輪寺に詣給とて御堂に大納言忠家
の墓乃給けるなとに御かりてよみ給
けり　権中納言俊忠
御うてゝ事に露を見給ひ御堂へまゐて昔の給に忘ぬ事あるか
云時々母身御かりてなけき給ふ比前
云実國の許まゐつかしけり
後徳大寺左大臣

なしさは秋の御堂の萩の葉をやなくらん
母の身御かりまけるを御堂におさめ給
ふ事よみ給ふ　皇太后宮大夫俊成女
今ハ御ハうれ世のさゝ乃堂へとゝ露消ぬ給と無
ゝ身御かりまけり秋堂ふしけり
りとまゐ事ゝ所にまゐりて
定家朝臣
玉ゆらの露を波もとゝ御らすなれ人忘ゝ宿の秋風
父秀宗身まゐりて乃妹寿風懐旧とふ
ことをよみ給ふ　藤原秀能

寝をあらに今ハいくこれ有衣あらまも袖とふく嵐が
久我内大臣妻れ比うせて侍けるとし乃
妹太御門内大臣中将に侍きる比つかし
けり　設冨門院大輔
秋深き住宅よいく思あるまゝ妻なの夜
返し　太御門内大臣
見し夜と思ふ時ハあきれ花秋の住宅ハけまそ遠き
思て掛中きる女身ありて後その事よと
まりて候侍なり　大納言実家
なほ秋の事し来床ハそれなりしの底ハ夜そ遠き

みち乃西へまゝまりけり聖中にめに毎日
さ海なるつれ侍きるをとらせ侍々れハ花なん
中将乃行うと申せこそへけまハ中将とハい
つまの人そと同侍々れハ実方朝臣のすと
なむ中けるに冬ハすまそ霜拈乃まそ紅の
くしとみえまゝりて折ふし掛なりしうおほ
え侍々れハ　西行法師
拈とせぬその名ありをとゝめ垂て拈のく薄かゝみそゝ
同行なりけるへ今ハ行こさまゝなり
よけまとしとひいそくよめる

前大僧正慈円

敷しきと思ふ源やひとりり友なれ山のみちしハ乃夜
母のしひに侍けり秋法輪ちにこりまて
あらしはいてく吹々れは

皇太后宮大夫俊成

うれ母ハ今ハ嵐の山風にこまやなれ行ましめ如ん
定家朝臣母身病りて坂雅比墓ニ
かれ嵩にと病りてよみ侍ぎり
病まにくるよハもかなしき松風を後にや苔の下にしたえん
堀川院くれ給く坂神去月風乃音あハ
まに出ぬ々れハ

久我太政大臣

病しへハ色なれ世もなりぎり身はむ鰥の心なるに
坂原定通身病りまて坂月あらき秋人
の夏に殿上になむ侍とてよみ侍けり

前

敷しきを別し雅をうそふまにハ八とせになりぬ昔の月
源為善朝臣身病りぎり夏の年月
をみて

能因法師

命あまにハとし雅も月ハ今の別し人にあふ秋なきか
世中をうなく人をたかくなり侍けるよ

中将宣方朝臣身まかりて十月斗白
川の家に御かりきりに和歌乃一葉のこれ
をみて
お大納言公任
きふこすいそやまし山里の和歌も人を常ならぬ
十月斗の云御に御し此前大僧正慈円
の許へぬまして時雨乃なとゆつりし
てつき乃年の神無月に云常の事あ
まことよみて御しけり中に
左上天皇
思出ゆゑ紫の夕煙むせふもうれしこゝに
返し
前大僧正慈円
思出ゆゑ紫と雲ゆゑ思ひ出ぬ夕煙に
雨中云常とゝふるを
左上天皇
なれ人の形見の雲やしきりん夕乃雨に色はみそれと
枇杷皇太后宮かくれて坂十月斗かの
宮の人々の中に誰ともなくて御し
なりせけり
御みみ
神無月しくるゝ比もいかなれや宮に過ぎ秋の宮人
右大将通房身まかりて坂手なりしひ

まさひて侍けり扇を見いくしてよみ
侍けり　　去御門右大臣女
手まさひ乃ちるなれ詞とみせしともなるき形見に成ぬ
新宮の女御乃許にて先帝の世給へり
きり双紙をみ侍りて　　馬内侍
見ても詞ハかくてもあ蓋の紙来りしぬ昔なる程り
返し　　女御嚴子女王
いまへ乃うきにかゝるゝ水蓋の紙そ袖のうらはりそれ
恒徳云かくれて後女乃許に月あるに来
思ひ内かりてよみ侍けり

道信朝臣
かしもあへぬ衣のやうにくらして月ともいふ手内とひ
入道摂政乃あめに万灯会をこなはれ
侍けるに　　東三條院
あ庭にちらの光ハ三千昔乃をいみてはそあけり
云忠朝臣月まかりにけるよみ侍ける
源信明朝臣
物をのゝ忘ひね光の枕にハ波かくらぬあるつきそなれ
一条院かくれ給ひにけるハそのみことをの
み意なけき行て暮に御かりかりしえ

給ひけましハ

上東門院

あふことをいまはなれねの夢なりていつハ君をしハみるべき

坂朱雀院くれ給ひ上東門院白川に

こもりて行けるときこそて

女御菅原生子 大二条宮白女

うしとてハ出(もり)ぬ家をいてぬやなとなくてにまうゐこん

鄙しらす

和泉式部

雅なりとなくれ先ゐの程何ハかくこゝに思へ為董の給

おさなかりきる子の身はかりけるに

源道湖

そうなりといふまをいと波のこうに付け世を粉こけるが

坂一条院中宮くれ給ひ坂人の夢に

なくて御人りあつきやらん思ふぬ山ちに独まさふと

小野宮右大臣身まかりぬときこそて読る

権大納言長家

玉のをはなかれぬ遊ぬ人をさ仙遊ハ露(よう)とことなるぬ

小式ア内侍身まかりてのちつゝに持て

侍きるを和補理に世さすとてよみ侍

けり

和泉式部

恋にふとさてにこふさけ〇の言にうち思ふる(まぬり)時のまそ(なき)

上東門院の小少将身ゆりてのちつゆに
うちとけて書かりしけり文乃掛け中に侍
きりとみいくして加賀少納云か許り
つかしけり

紫式部

維か世にあらんへてこんかきとめ詞は消せぬ形見なれも
返し

加賀少納云

なきへと思ふことも思ひまそそきふの衣はおほ我身と
僧正明尊かくれて後久しく成く坊なと
石蔵にとりまとして第おひ義りて
ことにまになりにけりと見へく

律師 蓉邏

なきへの詞とあふにとそきそこれはおもぬ里にも成ぬ
世乃ちうなれるをなきくはみちのくに
名あり所し書しう絵と見侍りて

紫式部

見しへの煙と成しなりなそむはまさ志が海の海
坂朱雀院かくれ給く源三位かりとに
つかしけり

弁乳母

お里君いかなる聖への煙そむなしき雲と成
也し

源三位

りしたひ出しまして女房に
中院右
ありまし川おなしなられいかりけるとみ
権中納言道家母なれ
右政大臣の許につかりし
皇太后
限りなきたひの程乃兼中ハおとろけ
返し
桜政太
乃し兼にやそ聞きれぬ我身とそ
母のおりひに給けるは又なり
乃あたりよろしとひて給
けり
清浦釣
世中ハみをきしもたゝなくてむなし
云常乃心を
西行法
いなけきいはしふきことなれハ後世志
前大僧
皆人乃知ほまして志らぬかなしき
時ゆ人ハいかにとおとろけと我なる
よをきふまいつかをしへさ霧のミハ
我もいつそあらほしかしとみ人を思

前参議教長ニ為雅ニ籠居て侍けるか
やまひかさりになり侍ぬときて粉燭に
雨かりける程に月まかりぬときてつ
かしきる

寂蓮法師

易きていかに哀となるむ(ニナイ)ん詠なき山のみねの白雲
人にをしまれてなけきをる人にはかりし
けり

西行法師

なき詠の面影とおもふ月にそへて思ふ人の恋なるため
なきくるす侍けり人とかすせうしかん
侍けまとも

哀ともんにしふ程かりいはまぬへくは問ようはせめ
云常乃んを

入道左大臣

行くとしへはかるしいまそかの哀とよそにきくさき
左近中将通家か墓前にまかりてよ
み侍けり

左御門内大臣

をしまれてみるそかなきさるなきをう努此詠と侍粉見
兄快法親王かれ侍て周忌乃まそに
墓前にまかりてよみ侍きる

前大僧正慈円

そこつとしひけきてきてこれはとしぬるを袖はぬ重

撞中納言國信

天なくてよろ方もなれ春柳のいとくうき世そしひ殺
かよひけり女山里にくまうなくなりに
けまいつまくと籠ゐくゝ絵ぞうかあ
らぬまに京へ向かりて嘯吟に高鳴
ぬとへくいそうし絵々れは

左京大夫おきまけ

いつ乃まに身を山かはにしそく殺を接としふ奴ん
なくれみとをおさめ多てまつりけるを
見くく

人丸

久堅のあめに志ありて天原に月日も志して忘るゝん
覚しらす

なのくこまち

あらはなくなれは数そふ世中に衰いつまれ日まてなけん

葉平朝臣

白玉か何そと人乃とひし時露とこそ入てけなまし物を
文衣の服にそまいまつりけるをみ給て

延喜御命

手ふれはくもあきり雲深のこゝろにてふそれ何ぬら
しひにそ人乃家にやとまつりけるをその家
に忘草おかく絵々れはあるに小清

りしけり

中納言兼輔

なれ人を思ふものそやこ草なかりの宿にやとりをそする
病にしつゝそひさしく歎ぬく侍けるか
ゐまくよろしくなりてうちにまいりて
右大弁公忠義人に侍けるにあひて又所
さそ計にまいるへきにはやて所出をうまゝに
病なりくなりてうきりに侍けるは公忠朝
臣につゝけり

菅原季縄 繼ー

くやしさそ後にあひんとひ(契けり)をきしを限といひしほ想を
母乃女御かくれ侍そ七月七日によみ侍
けり

中務卿具平親王

雲深の神ハ宮にもをきなくに忘れりもあへて寝そこ
うせにけり人乃ぬしのゝ中なるを見ん
出しくうれゆりなる人乃りとにつゝけ
けり

紫式部

嘗ぬまの月をハ思ひそ人乃世の衣を知そうへ
よろなる

新古今和歌集巻第九

離別部

陸奥国にくたり侍ける人に裂米をとく

なとて読侍ける　貫之

玉鉾の道の山風さむからいたくみそらにきなんとそ思

あいしらす　仲雅

三なん世にもこちの御る山いつくに人にあかんとすらん

おきうしすちきりて侍ける人の行まれ

侍けるに　紫式部

小へ行侍の廻にことつてよ雲のいかきかれ絶まして

田舎へまかりける人に猿衣ぬかりすとて

大中臣能宣朝臣

秋雪のあつ猿衣をきてみよ霧かりなる形見なりとも

みちのくにくたり侍ける人に

貫之

見てたにもおぬんと玉鉾の道のおくまでへの行ん

松坂の実のちるきことにしたみ侍ける

堂の前に雨かりける人に餞し侍るとて

中納言兼輔

松坂の関に我宿なりせいわるる人いたのまにしまし

寧昭上人入唐し給ひしに袈裟をとり
給けるに立ちをしらでをひて侍るに
し事
よみ人不知
きるせと思ひ物を接衣あり日をしらす故にけるに
返し
寧昭法師
これやさは雲にそこそにをるとしらぬ天の衣
覧しらす
源重し
安川に遊人の別にハ袂までこそ事ハあらはれ
みちの玉乃上けにくゆりきる時花永卿
の許につかはす
高階經重朝臣

行末にあふくま川のなりせいかにかせまほしきふの別を
返し
夜原花永卿臣
君に又ふくま川を給へきに秘りしてなき我そ返さ
を宰師隆家くらりけるに扇給ふとて
枇杷皇太后宮
是は所はいさ乃松原まほしけるたそふる扇の風なしをそ
亭子院宮あれ所らんしにおはしまし
けるとも小素性法師めしくをしれて
まいまりきるを住吉のこゝりにていと面
あまりせてく大和につかはしきるりよみ

給けり

一條左大臣（右イ）　恒佐

神云月まれ乃行幸に所そ運て者ふ別なはいつかあひえん

無ひしらす

大江千里

別て此後もあひえんとしへ共それをいつ運の時とかはしら

成易法師　入唐し給ひるに母のよみ給けり

もゝしも天の下にそありとさてゝる日の本を忘所なん

降行に出立とて人乃許につかはしけり

道命法師

別路は笠や限の猿なりん所にいてへきこゝろそ世

老なりとや母乃七月七日に筑紫へくたり

けるにあるにはなれぬるをとしひて八日

乃嘯をくりて（ひそイ）無にけり不につかはしき

加賀左衛門

天川空にきこえし無にはれ我そまにりてしき給はしき

実方朝臣みちのくにへくたり給ひるに餞

をとてよこし給ひる

中納言隆家

別路はいつもなけきの絶せぬにいとゝ返さ報ひ給

返し

菅原実方朝臣

とゝ雨ふんとはふるへ共いかにかせまし秋のさそふを

七月斗みまにかへくたりとて都の人につかは

しけり

前中納言通房

都をハ秋とりにそ立そめしよとの川勇いく惠へたる
見これ家と申けり時に宰大貳実政学
士にて侍りけるに甲斐なりてくたり侍きるに
餞給ひすとて　後三条院御命

思ふハ雲ゐ宮とも月ハみよ程ハ雲ゐにめくりあまて
陰奥國乃ちりとよりれ都下久しく所ひみ
ぬよりしやしていつのかるへしともいふす侍
かれて　基俊

西こん程思ふまもあけくまれまへ我身ようにて老ぬ道

修りに出侍けるによめる

大僧正行尊

思へた定なれ世ハなきにいつをまてとも元そなのまね
にハかに都をとるなくなりにけるに
女よつかしまる　讀人しらす

契なくことそ所にふなりしかかひて思ひ別なく稱ハ
別の心とよめる　俊恵法師

なきそめれ別とおふをとへたいまや西との猿とも語
登蓮法師

西こん程をやへに契しまし思ひ道ぬへき我身如せハ

守光法親王五十首言よませ給ける時

藤原隆信朝臣

雅としも思ひぬ別の道さは松浦の海をさす無へ

登蓮法師はくしへまかりけるに

後恵法師

たるくと思ひわくべき白波をあやぶ屋と海の袖に重

陸奥國へまかりける人に餞し給ふに

西行法師

君いまは月給とてもなるめやらんあつまぬこの夕蓋聲

幸取に修行せんとて出立けるに人にわかれ

なれしこそよみ給ける

あのめをうん君もしやなくさむとうへらんとはいつとなく

明日とりに粉おぶとを粉むかしてぬ別は

幸取へまかりける時師光餞し給けるに

よめる

道因法師

四こん程を契らんと思へ大老ぬる身より定ひたれ

慈しらす

皇太后宮大夫俊成

今日そあれ猿乃別と思ひ老ハ波もこそとめね

祝部成仲

別しへハ又りやみ見れ山ほとゝきはしきをいまになきかや

定家卿臣

忘るなよやとる袂はかたぶとも思ひ出るかたの月新
都乃和へまかりけるへよりそ（をりイ）けるなし

惟明親王

なりしふ袂よりこそ忘るまとりわるゝ様の行末殿
けるしへまかりける女に月いてしあり扇
をくるとて

讀人しらす

都とは心を望にいそねとも月ゆえ宿に思ひをこせよ
を取に由かりけるへよつゝしきる

大藏卿行宗

別ちは雲ゐのよそにぬぬともそれ世のたりまとす
人乃くまへ由かりけるへよりまきぬける
にすとて

菅原おきつな卿下

色ゆゑ深くる様ぬりなりしたんまその
こゝみとも見んよ

新古今和歌集巻第十

羇旅部

和銅三年三月菅原宮より素宮の都に
うつり給けるに　元明天皇御所

ふる雪はおすかの里をこさそいなるは天の御なり今はいもあらん

天平十二年十月伊勢國御幸し給
けるに　聖武天皇御所

いもに恋まれ松原みまくせはしるひ乃ゆくこはしら鳴海
りろこしにくよみ給けり
山上憶良

いさやこゝろ（こゝろ）や日のりとへおかしものゝ乃浜松まちも恋ぬらん
きゝしらす　人丸

おまはらひ乃なるちをこれ人まは明石れとりやまと
藤のたゝみ山もそ（さ）ゝにこゝろめり我はいもしふ別さぬまは
帥乃任にて筑紫よりのぼりに給けるに
大納言旅人

こゝにおりて清くしやいつこ白雲れ毎なひく山の西にみたん
鄙しら次　讀人志しらず

鶴雲にぬまは衣なきけて独や笑る山ちこ西にん
あつまれかゝへ海りけるに阿さ海れけ乃

きゝりの事にとこそよみ侍けり

葉平朝臣

信濃なるあさまのたけに立煙をを人のこゝやはとゝめぬ

駿河國うつの山にあつる人なりつきく

京にはかりしきり

すゝかなるうつの山へのうつゝにも夢にも人にはかはぬ也なり

延喜御時屏風哥

こゝろ

波の上にかゝるは見えつゝ行舟ハ濁喰風の立るへ成なり

貫之

菓枕夕風寒く如にきり衣うつなる宿やかしまし

角いしらす

白雲のたゝなひき海の足曳の山の材々にや越まし

たゝみね

東海の浜やの中山さやかにも見てぬ雲ゐと世(よ)をやはくさん

いせより人にはかりしけり

女御嚴子女王

人を稱ふこゝ也や都鳥なりやとたにも問をきゝ

彭しらす

菅原輔昭

まゝ志てぬ故に人ハきふまそにこんとたのめし我を待ん

三ヶ月の鳥かなれをゆけはあつまま山々雪立ぬ宿なし
神風やいせの浜荻折敷て猿ねやまとゝ御ゝき浜に
亭子院ゆくしおろして山々寺々修行し
給けるに此ゆとりに給ふ和泉國ひ〇と云
所にて人々云よみきろによめる

橘良利

夜の猿ねの夢にみしかはうしやまとゝ又とこそは
給清のみさられて書しる絵にその原と
立ぬに猿人やとりて立あし鳥の所

茂原浦平釣臣

立ぬらしと秋は明ぬその原や姫さやとゝふもひなる程
鬼しらす

御歌宣旨

都にてこゝちの宮をなるあつて雲のといひ程にきにけり
入唐し給きる時いつ程に御つき人のとひ
けまとも

法橋察我

猿夜あらし時ち壹々れはいさ白雲の程りしらまに
志さの乃浦に御かりてあそひけるに年
小とまりてこゝみ給きる

藤原実方朝臣

舟なりしと米斗は猿ねさん志きつの波に爰はさむとも
いそのへちのうらに降行し給きるにひと
つまくしなりきる同りを踏うしなひく
本の岩屋のうらへ海とてあまへのみてけり
に降行たんみしは芝をとらせよとてよみ
けり

大僧正行尊

我とくあを踏ハあまに舟人もなきにの給とてよ
うつ海の舟にて夕立れ志ぬへ天よしを
申けるをきてよみ給きる

笠武部

うれくしゆうり夕なつ波のおらきれはうれくる舟そ志ゐなき
天王寺に来けるに難波の浦にとまりて
よみ給きる

肥後

ほよ更てあしの来こす浦風に衰うらそふ波の音かれ
猿命しとてよみ給けり

大納言經伝

猿ねして嘆くこの麻は言はいなはとなく秋風そふく

恵慶法師

まれりこう猿ねの衣うすき程よきて海のなんよりの山風
坂冷泉流に付うへの花のことも猿の方

よみ侍けるに　　大江中務隆縄
あはれとやひとり猿の山里に哀しき猿ねをなきす
身のうれへ侍ける人によそへて初せり
まうしてよろしき所より草を結て
枕よせよとて人のさそひて侍られいよ見ん
侍けり　　赤染衛門
何りし世の猿はさひ中もおもさらき独寝も草枕
堀川院百首に　　権中納言国信
山ちかくそよくにすむ白露の嘘なきよ木の葉よ
大納言師頼

草枕猿なくの人々せよありあけの月にとなきぬらり
水辺猿宿といふ心を　　源師賢朝臣
いそなれぬるそ島人猿ねすゝむあしの丸屋の白波
田よそてよみ侍ける　　大納言経信
猿はなくといふのしの丸やはされい風木となりつゝむ舟なき
題しらす
み山ちかくに住や出る猿人のたまさかに宮つかへし侍
猿宿の雪といふ心をよみ侍ける

修理大夫 顕季

松の下におもひしきよもすゝかに袖に雪は降て
法奥國に侍ける時八月十五夜に京を
しひいそ大宮の女房のりとにつかしける

橘為仲 朝臣

見しへもとふのうら風吉せぬにつまなくすめる秋の月
開戸院と云所にて罰中見月心を

大江 新言

萩の葉にはけの都出くいく夜の接の月にはゆらん
守覚法親王五十そ方よませ侍ける接奇

皇太后宮大夫 俊成

夜ありはしのうちはも急也玉江の月の時ゝ乃宮
立かりみもきそこん松陰やなしまの苔や波にあらすか

夜原定家 朝臣

ことへよしひおきけの演子為なく出給乃月新

藤原家隆 朝臣

聖の露浦は波をかたちてもあらはしぬ袖の月新(かゝ)
接の奇とそしめる

橘政大臣

りろともに出し宮より忘しまて都の山乃在明の月

題しらす　西行法師

都にて月を哀と思ひいかすにもなしぬるさひしかり
月みると契をきてなかへの人りやこよひ袖ぬらしけん

五十首奇事しし　附

家澄朝臣

あけいしこゆへき山のみねなれや雲行月乃末の白雲

藤原雅經

なかへの面影はそひしと月まそ契るさよの中山
和奇取月十首奇合の次に月のまへ乃
接といへるんをへこほうまつりしに

接政大政大臣

三重と契て出し面影はこゆらん袖を なかへ乃月
接奇とそよみ侍けり

前大僧正慈賀

東海乃ふれなるあをかてるん都の山にうつ月を
海濱重来といへることをよみ侍し

越前

いく秋の月を哀となるあきて波に折しいせの濱荻

百首奇事　附

宜秋門院丹後

志しきりやそせの波をなるしてうしく袖いせ乃濱荻

見しらす　中納言通房

風雲みせの演萩分ゆきハ衣かりの○波よかくや

檀中納言定頼

破なまそんもときぬこも枕おくくかけそ水の白波

百首奇なりしに　式子内親王

行末ハ今いく歌とう岩代のなるのやねに枕むすとん

松の○乃をしまう破の所に枕いてくかぬまそあまの袖かハ

千五百番奇合より　皇太后宮大夫俊成女

うくしてもおもせハいく歌をあらん山ちの苔の露乃遊に

猿まそよみ給けり　權僧正永縁

白雲乃ゆ猿ほもなくなぬにふるき山ちに日ハ蓄に分り

蓄望行　客といへるんを

大納言經信

夕日さす浅茅ゆ原の猿人ハ衣いてに宿をかるん

猿政太政大臣家ゆ合小羇中晩嵐と

云ことをよめる　菅原定家朝臣

いくにかこまひハ宿をかり衣日も夕蓄れる○乃嵐に

猿奇とそよめる

猿人の袖吹ぬまて秋風に夕日さひしき山のかけそ

夜原家隆朝臣

夜にはさしも嵐の聲もはしたゝぬ人をさやの中山

藤原雅經

白雲のいくへ〇を越ぬらん事もぬ嵐に袖を雨ぬて

源家長

きゝ〇ぬ聖原に行嘗ぬいつまの山の月は出らん

和奇取奇合に羇中嘗と云ことを

皇太后宮大夫俊成女

夜にも秋は夕をとしてふ(とり)風のこゑとうなのく志れ原

雅經

徒に雨つや淺まの夕煙里とひかぬうなちこ紀の山

宜秋門院丹後

都とはおまつ宮とも云きかりき何なりむん雲なきにて

夜原秀能

草枕夕乃宮を人とうくなきてもつけよ初鶴のこゑ

猿のんを

有家朝臣

ゆし俺ぬをのくをしくれり枕をうなの夜(寝)や一夜計に

石清水奇合に猿宿嵐といふことを

岩ゝ〇乃庵に嵐をうこぬく独やねなんしよれ中山

猿乃奇とて

夜原業清

誰となき宿の夕を契りそうらあるといく秋回らん

羇中夕といへるんを

鴨長明

枕とていつまの草に契らん行を限の聖へ乃夕嘗

あつまれうこに雨かりけるに小くよみ

侍けり

民アヽ成範

夜のへれ草乃春草に駒とめて松原にとうへりみる

長月の時もつせよ雨うてけるにてよ

み侍けり

禪性法師

初を山々とえ蓋て宿とへいみまの橋原に秋風そて

猿言とてよめり

菅原秀能

ほうぬさに杉の猿ねかなしきに松に吹也庵の山ゝせ

桜政大臣家言合に妹猿といふことを

藤原定家朝臣

三なん鈴とかつきそなりにいなるを乃山ゝまの秋風

百首言なりし時猿の命

菅原家澄朝臣

契らねと一夜ハ明ぬ清見うこ波よわるゝ嘆乃雲

千五百番言合に

故ゝまたのめ人を来の松まつらん袖に波やこすらん

方合し給けり時接の心をよめる

入道前関白太政大臣

旦をかけて都思ふ乃しさひて波よりかりの音信りなし

堀川院御時百首方をすけり時接奇

荷原朝仲

何をかふ我身は遠にきさらぬ所やいまだ接ねぬ

入道お罵白家百首方に接のんを

皇太后宮大夫俊成

難波人おしめ火角ゝやに宿りてしてしに袖の志をしるかな

尋しらす

僧正雅縁

みをこん人をとゝ海ゝは袁志重よりおしけるみ○れ推に来

前右大将粉朝

なをうゝ姫しの姫もわつさりきつるゝ海りなき所なしさよ

述懐百首よみ給けるに接奇

皇太后宮大夫俊成

世中はかれしさけき志の原や接は何をいとも苦にも

子五百首奇合り

宜妹門院丹後

おもひかな都にすまぬ都ゝ為ことゝ姫人にいてこそ

天王ちゝへ諸給けるにまいかに西降給々れ

宿に宿をかりけるにかし侍しさりそれは
よみ侍けり　西行法師
世中をいとふまでこそかたからめかりの宿りをたにむ君か
思ふ　遊女妙
世をいとふ人とこそきけいかりの宿に心とむなとしたふ事そ
和方取りそ行のことも猿の命法かう
まつりしに　菅原定家朝臣
袖にふけさそ猿は乃夢も見せしたふことよりかな　風
猿はまつ夢ちはゆるせうつ乃山里とはきかすりかへ也

侍を方に合侍けるに山路秋行といへ
なんを　菅原定家朝臣
都にもいまや夜をうつ乃山夕霜にぬ葛の下みち
鴨長明
袖にも月かれは契をかす源は志るやうの山こえ
前大僧正慈鎮
鈴田山枯りへの袖をみよ木々の梢は時雨さるまなり
百ぞ方をしし時猿命
さとりしまことの道に入ぬ里は忘しかるへき故也
初をに詣てかへさにあすか川乃初とり

まやうりて侍けり秋よみ侍ぬ

素覚法師

故人の詠んとおもすら川海ぬさ紅に関せたる家
あつまれたるにまかりけるにより見侍ける

西行法師

年あけて又こゝろしとしひきや命之なりけるの中山
猿奇とて
しひたしの心に思ひ重て窮分の袖のかへりぬるか
態聖にまいり侍しに猿乃心を

左上天皇

見るまゝに山風あらく時雨るめり都を
いまや秋さむなるらん